旅が、何もなく知れたから、秋かれ出でたわびしいそのうらに、松を吹き渡る風まで、何やかやと様々心の底にかこつてゐまれた歌。

思ふことなくてぞ見まほしのゝと、ありあけの月の志賀のうら波。

をはと云ふ間のある頃、志賀の浦を過ぎ給ふに、有明の月くまなくすみわたりて、寄せかくる浪の音もさびしきに、松ふく風の身にしみたるまゝ、とりあつめ心ぼそし。

思ふ事なくてぞみましほのゝと、

ありあけの月の志賀のうら波。

その後、辛うじて笠置くはだどり參られける。

◎雨儀。奈良。◎さうなく。左右なくの音便で無造作にといふ意。◎たばかり。謀事。◎もてなして。もてなしての音便。取扱うて。◎事行ひ給ひつゝ。相圖をなされゝゝして。◎卯の花おどしの鎧。表裏の縅の一種。白糸と卯花糸とで一段毎に交互に縅したもの。即ち白は花に卯花は葉に象つたものである。◎鍬形。鍬形は兜の前立の目庇の上に、左右に角の如く立つてゐるものを鍬形といふ。鍬形は兜の一種。鍬形の兜。

◎大矢。通常の矢よりは長く大いもの。矢は通常十二束三伏であるが、それよりも長い、十三束も十四束もあるもの。束は指四本並べた長さ。◎すゞしの狩衣。生絹で作つた狩衣。◎箙の胡簶巻。箙の末で縅した胡簶巻。胡簶巻は縅の一種、胴の縅法が箙に巻いて背で合せるやうに作つたもの。腰手縅、逆板縅、裾濃縅、菱縅、下にも着る、上に着るを上胡簶巻、下に着るを下胡簶巻といふ。◎からの帯紐の意、略してタヘガヲといふので、紐の手は殆ど手、タヘ形を用ゐるのはタヲヤといふを加へて、紐に取つて、凡て物の増し加はるのは多出産ある用ゐるのである。

◎山法師。比叡山延暦寺の僧兵。延暦寺は歴代皇室の尊崇が厚く、隨つて所領も多く財も豊かであつた為に、僧兵を養うて之を山法師と稱へ、かくして不法の事のある者は、直に暴力を以て事を遂げたのである。◎荒武者。武勇力の大なる。◎荒らかなる。荒らかは其名に持つ

に前表の鍬形とかを着けられる。大納言は「唐の鎧着て」と仕立てた狩衣の下に、赤い直垂を透き通らせ着て、武士姿だとはいふものの、西陣の綾太刀を佩き、六波羅から出る。主上は笠置から山に御出でになるといふ。

東の死んだのが手出でゐる海道筋最も厳しく、方の武士が討たれた。山法師も厳ひなど、園むも。主上が比叡山に御出でになると考へて、武士ども大勢狩寄せてとりどもが大勢狩寄せてとりこめ奉らんなどいふやうで、まだ夜明けにならぬのに、「武士共だ」とはいふもの、西陣の綾太刀を佩き、六波羅から出でに前表の鍬形とかを着けられる。大納言は「唐の鎧着て」と仕立てた狩衣の下に、赤い直垂を透き通らせ着て、武士姿だとはいふものの、西陣の綾太刀を佩き、六波羅から出でになるといふ。主上は笠置から山に御出でになると考へて、武士ども大勢狩寄せてとりこめ奉らんなどいふやうで、まだ夜明けにならぬのに、

一面に霞み渡つて、春の景色もいとゞ心細りがした。六波羅の武士共は、「唐の鎧着て」と仕立てた狩衣の下に、赤い直垂を透き通らせ着て、武士姿だとはいふものの、西陣の綾太刀を佩き、六波羅から出でになるといふ。主上は笠置から山に御出でになると考へて、武士ども大勢狩寄せてとりこめ奉らんなどいふやうで、まだ夜明けにならぬのに、

てゐる海東の死んだのが。海東の東を關東の意にとりなして鎌倉を祝うたのである。◎謀られ奉りにけり。欺かれ申したわい。◎都へまぎれ和はす。雜人に交つて、其人だと見別のつかぬやうにして、京都へ行かれる。◎夜ふかく。夜のまだ明けない早い時をいふ。古本では三更と書いて夜深しと訓んだ、夜半が過ぎて、まだ曉には時間のある頃をいふ。◎有明の月。有明どろの月。「有明」とは、月が空にありながら夜の明けるのをいふ、即ち月の十六日以後の夜明け。又單に有明月のことを有明ともいふ。◎志賀の浦。近江の志賀郡の琵琶湖に面してゐる邊をいふ。◎寄せかへる浪。岸邊に打寄せては戻る浪。◎とりあつめ。有明の月、浪の音、松吹く風など何やかやと樣々に。◎思ふ事。歌意、心に心配事がなくて眺めたい、眺んのりと夜の明けてゆく、有明月の光に照されてゐる志賀の浦波の風情を。うら波は、浦邊に打寄せる波。「ほのぐ〳〵と」は、微かに、ほんのりと。「ありあけ」に、夜の明ける意と有明月との兩意を言ひ懸けてある。此歌は新葉集にも「文貞公」の作として載つてゐる。「文貞公」は師賢卿の諡號。

かやうの事どもも、例のはや馬にてあづまへ告げやりぬ。只今の將軍は、むかし式部卿久明親王とて下り給へりし將軍の御子

【通釋】

このやうな事どもをも、例の如く早馬で鎌倉へ告げてやつた。只今の將軍は、以前に式部卿久明親王というて、鎌倉へ下向せられた將軍の御子である。守邦親王と申上げる。相摸守高時といふは、病氣の爲に、まだ年は若いけれど、先年入道になつて、今では、世の政務などには關係しないが、鎌倉の主人であるやうである。性質などはなぜであらうか、シカとした心がなく、朝夕好む事というては、鬪犬田樂などを愛した。この高時は最勝園寺入道貞時という者の子であるから、承久の亂の時の義時からは八代目の孫に當つてゐる。昨今執權職の後見役なり。守邦の親王とぞ聞ゆる。相摸守高時といふは、病により て、いまだわかけれど、一とせ入道して、今は世の大事どもいろはねど、鎌倉のぬしにてはあめり。心ばへなども、いかにぞや、うつゝなくて、朝夕このひ事とては、犬くひ田樂などをぞ愛しける。これは最勝園寺入道貞時といひしが子なれば、承久の義時よりは八代にあたれり。この頃、私のうしろみには、長崎入道圓基とかやいふものあり。世の中の大小事、只皆この圓基が心のまゝなれば、都の大事かばかりになりぬるをも、かの入道のみぞ、とりもちておきて計らひける。重き武士ども多くのぼすべしときこゆ。大かた京も鎌倉もさわぎのゝしるさまけしからず。承久のひかしもかくやと今さらに思ひやらる。

◎久明親王。後深草天皇の皇子。◎守邦の親王。花園帝の德治三年八月に將軍と

には、長崎入道圓基とかいふ者がある。天下の大小の政務は、たゞこの圓基の心の思ひ通りである から、都の騒動のこれ程に甚しくなつたのをも、かの入道圓基だけが、取扱うて指圖した。身分の重い武士どもを大勢止宿させると聞える。大體、都も鎌倉も騒ぎ騒ぐ有樣は、尋常一通りでない。承久の亂の昔もこのやうであつたらうかと、今更に想像される。

【通釋】

持明院殿には東宮が御出でになるから、案外に芽出度ある筈の事であるけれど、今男目には、まだ軍の混雜で何の取計ひもない。御宿直人の力瘤みになるやうな者もなく、賴り賴れて居るのも危險な感じがするからであらうか、出來る事ならば、六波羅近くに居らうというて、六條殿へ後伏見院花園院東宮などが引き續いてお遷りになつたが、一の經つと共に天下は到る處騒いで、恐しい事ばかり聞えるから、猶六條殿も危險であるというて、北六波羅に、代々の將軍の御館にというて造つて置いた檜皮屋が一棟あるのに、兩院と東宮とがお入りなさる。大體は

なつた。◎一とせ入道して。高時は正和五年七月に執事となり、嘉暦元年二月に年廿四で病の爲に出家し、法名をば崇鑑といつた。◎いろはねど。取扱はないが。關係しないが。◎鎌倉のぬし。北條氏の嫡流であるから、鎌倉では一番に威勢があつた、依つて「ぬし」というたのである。◎いかにぞや。どうしたのであらうか。◎うつゝなくて。正氣でなくて狂人の如くなるをいふ。◎犬くひ。犬を咬み合はせる事。鬪犬。◎八代。義時、泰時、時氏、經時、時頼、時宗、貞時、高時の八代をいふ。◎私のうしろみ。天皇を公といふに對して、執權職の後見役（即ち、執事とも內管領ともいふ）を「私のうしろみ」というたのである。◎長崎入道圓基。高時は宗鱗の故を以て執權職となり、最初は政事をば妻の父なる秋田時顯と內管領の長崎圓基とに委ねた。然るに、秋田長崎の二人は心を合せて無事であつたが、圓基が謀めて其子高資が之に代つてからは、彼は高時の暗愚なのに乘じて、威嚇を振ひ專斷を事として止まなかつた。圓基とあるは高資の誤であらう。◎重き武士ども。威勢の重い武士ども。◎けしからず。異樣である。甚だしい。

持明院殿には、東宮おはしませば、思ひの外にめでたかるべき事なれど、今日あすは、いまだ軍のまぎれにて、何のさたもなし。御とのゐのもの〳〵、うべ〳〵しきもなくて、離れおはしますも、あぶなき心ちすればにや、せめても六波羅近くとて、六條殿へ本院、新院、東宮、引き續きてうつらせ給ひぬれど、猶これも危しとて、そろしき事のみ聞ゆれば、おける檜皮屋ひとつあるに、兩院東宮入らせ給ふ。大かたはいとものしきやうなれど、よろしき時こそあれ、かばかりのきはには、何の儀式もなかるべし。

◎持明院殿。後伏見上皇の御所。山城國京都上立賣の北新町の西、今の安樂小路に在る。◎東宮。後に光嚴院と稱へられた量仁親王のこと、後伏見院の皇子、後醍醐帝の東宮。◎思ひの外にめでたかるべき事。案外に結構である筈の事。東宮◎何のさたもなし。どういふ取締めもない。鎌作のとりきめもない。◎うべ〳〵し。然るべき願みになるもの。「うべ〳〵し」は諾々して、「う

院東宮などの御幸や行啓の儀式は、其だ仰山なやうであるが、世の平和な時こそ歓娯を整へもしようが、これ程の騒乱の際には何の儀式もないであらう。

【通釋】
笠置殿に於ては、大和河内伊賀伊勢などから、武士どもが参集する中に、事の始めから頼みにお思ひなされた楠木兵衛正成

べ」は承諾ふ意、いかにも道理だと承引く意。◎隠れおはしますも。六波羅、らるるのも。◎あぢなき心ち。大覚寺統の者共から襲はれさうな危険な心持。◎六條殿。京都六條の北、西洞院の西にある。もとは平業忠の邸宅であつたが、寿永二年に後白河法皇が仙洞とせられ、持佛堂長講堂を建つて法華經を講修された。其後建長四年に之を鷹司院に譲與し、更に文永十二年に鷹司院から後深草院に譲られ、以後持明院統に傳はつたのである。◎将軍の御料。将軍が都を出でて鎌倉へ御下向の際、暫時其處に落着かせ給ふ爲に建てた六波羅の北方にある檜皮屋をいふ。◎いとものしきやうなれど。大體に院東宮の御幸行啓などいふ儀式は、甚だ仰山なやうであるけれども。◎よろしき時こそあれ。世の平和な時には仰山に行粧を整へもするけれど。◎かばかりのきは。これ程の世の騒れてゐる時は。

笠置殿には、大和河内伊賀伊勢などより、兵ども參りつどふ中に、事のはじめより頼みおぼされたりし楠木兵衛正成といふものあり。心猛くすくよかなるものにて、河内の國に、おのがたちのあたりを、いかめしくしたゝめて、このおはします所、若

といふものがある。これは心も猛く気象も剛健なもので、河内國で、自分の家の近邊をば嚴重に造築し、この主上の御出で遊ばされる笠置山が、もしも危險であらう時は、行幸を御迎へ申上げようなどと用意した。鎌倉の武士共も次第に攻め上る趣が聞える。初めから都に居る武士どもも我先にと争うて攻め圍む。木丸殿では、北條方の軍勢が攻め上るとはいへ、重立つたシッカリした者はない。どうなりゆくであらうかと、大層心細み少く心が亂れる。御自分の御心からしでかした御事であるか

し危からむをりは、行幸をもなしきこえむなど用意しけり。あづまのえびすどもも、やう〳〵攻め上るよしきこゆ。もとより京にある武士どもも、われ先にときほひまゐる。木の丸殿には、さこそいへ、むね〳〵しきものなし。いかになりゆくべきにかと、いと物心ぼそくおぼしみだる。わが御心もての御事なれば、かこつかたなけれど、故郷の空もあはれにおぼし出でらる。秋も深くなりゆくまゝに、山の木の葉のうちしぐれ、谷の嵐のおとづるゝも、かたきのきほふかと、肝をけす御すまゐ、いつしか御身をかへたる心ちし給ふもあぢきなし。

うかりける身を秋風にさそはれて、
思はぬ山のもみぢをぞみる。

◎笠置殿。笠置山の行在所。◎楠木兵衛正成。元弘元年後醍醐帝が笠置山に居ら

れた」者、「主上の御事に、「義経殿の御運に大なる御末がある」と、世が世に義経

してゐる。そして其の下に御面の御運を賭けて、三公百官が所望してゐる、「妻子

二人忽然と現はれて主上の御前に進み、「天下の国に御命を賜ふべき者が

なし、たゞ一人大臣に御面して賜けられてある御座がある。これが王座であります。」

といふやうな事を語つて、妻子は天に上り去られた」と御覧になつて、参内が

延められた。其所で参を占はれた結果、相氏といふ者があつて、既をまび御面の

王位に即かしめるのだとお知りになり、相氏を召されたといふ事が、大平記に見

えてゐる。◎おのがたちのあたり。自分のまわりの近辺。赤坂城にたて籠つた事

をいふ。◎いかめしくしたゝめて。厳重に構へて。◎行幸をなしまつらん。行

幸を仰ぎ申さう。◎さこそいへ。北条方の軍勢が武力で攻めようとも。◎おの

〳〵。◎おのれ〳〵。◎いかになりゆくべきにか。◎笠置山の険

しきもの。笠置山を考へて、言立つた人。◎おのれなりけりと。◎おのれ

命はどうなつて行くのであらうか。◎おのが心もてのみ思はれば。我意勝手に思

身の事でしてゐる事であるから。◎あこうまれながら。◎あこうまれながら。

けれど。◎故郷の空もわすれにおぼし出でらる。故郷の方の事をも忘れて思ひ

思出される。◎不自由のない身の生活や又は母君その他の人々の事が懐しく思

のである。◎あたゝかなる御ふところ。御寵愛が身に集つてゐる事をいふ。

◎いつしか御身の上なども懐しく思はれ

のみならず、山も里人など思ひ出されるのである。

さてはれて、思はぬ山に

【語釈】

最早戦争の武士どもが、笠置の如き険山の要勢を築き立て、上洛する途

が聞えるから、笠置に於ても大層心が落着かずに

居ても立つても居られない。元来この辺は

一帯な山里の事故、

石弓などといふものをも

準備し置くられる。従つて

島には渡れまいと頼みに

して居られたのに、後ろの

山から敵軍が襲れるおそれ

が出来て、城門などを破り入

り、寄手所の近辺に見やう

ようにあら、今は頼

もかくもの心持。何時の間にか敵軍の地位をかくて、一天萬乗の帝位から御人

なり下つたやうな心持。◎うらみ給ふ。恨んで、北条氏討滅の志をも捨てられたい

て、辛い事に思ふ此身であるものを、我儘に許はれて、意外な山の征軍を見る事

である。「君の、臣の」といふ言を省略が、具といふたのである。

既にあづまの武士ども、雲霞のごとくはせ集り上るとし

聞ゆれば、笠置にもとよりこれほどの用意はしたれども、もとよりこれほどの

しき山の深さこそはあらめ、ましてはず、木戸、かも木、石

弓などいふ事どもしたゝめられる。さりともたやすくは彼れこと

頼ませ給ふに、後の山より御かたきうづれ参りて、木戸どもを

焼きはらひ、おはしますあたり近く、既に煙もかゝりければ、

今はいかにせむにて、あやしき御姿にやつれて、ただ一人出でさ

せ給ふ。座主の法親王は御手をひき奉り給へるが、いとはかな

げなる御有様なり。中務の親子、大塔の宮などは、かねてより

ろう互に面目、具行の大納言入道が、及び難き時の心持など、夢を見る時の心持にて、丈夫の中を述れり合ひて、道を探しくして、なる程身なりをおとしめて、なる程身なりをおとしめて、なる程身なりをおとしめて

◎深きつゝらをり。深山の羊腸たる坂路。つゝらをゝ」は、九十九折とも、丸折とも書く、坂路などの曲多き意。◎木戸。いりロ、即ち城門。◎さかもゝ木、逆茂木の意。枝の葉つてゐる木を逆に立て、垣の如く編んで敵を防ぐに用ゐるもの。◎投石。石を投き飛ばして敵を射殺すに用ゐる昔の武器。之は銃などの発明せられない時代には重要な飛道具で、我国では此武器を用ゐた事が神功皇后紀に見え、雨寒源平時代から室町時代の中頃まで用ゐられた。◎さりとも。大事が攻め寄せても。◎今はいかゞせむにて。今となつては、何としようぞ、降方ないといふので。◎ただとり出でさせ給ふ。道を探し求めて出られる。◎はかなげなる御有様。かよわい御有様。頼み少い御有様。◎柿木がたち。赤坂城。◎行幸もそなたざまにやと。行幸も赤坂城の方へ成りにならうかと。◎ほのぼの。火焔。◎夢とだに思ひもわかず。夢といふ程すらも分別がつかない。分別のつかぬボンヤリしてゐる有様をいふ。◎少しの引きせ給ひて。少し遠ざのびなされて。◎御心ちも損はれて。御心も疲労して。◎誠にあやふく見えさせ給ひぱ。如何にも困難なやうにお見えなさつたよ。◎たかまの山。高の市（タケチノヤマ）山の事で太平記に、「山城多賀の郡なる有王山の麓まで送りさせ給ひけり云々。」とある有王山はこの中山のことである。◎御心ちをためらふ所に。御心の疲労を休めようあらうか。山城国綴喜郡多賀郷、即ち今の多賀村と井手村とにある中山のこと。

まも自分の部下の武士どもも無くて、たゞ目を見合はせて、どうしよらかと呆然としてゐた。具行藤房忠顕少将などをも、そのまゝ守貞直といふものが、大勢で参つた。今はたゞ何方がとも仰せられやらず、とらへ方がないから、敵の為に御詮身をまかせて終つた有様である。

◎ままもなく宇治に行幸なさり上給へた大将軍の陸奥かと出心なふずも連れられて御いたなどいふのも一酒りの言ひ方で、それ以上のつゝまも自分の部下の武士どもも無くて、たゞ目を見合はせて、どうしよらかと呆然としてゐた。具行藤房忠顕少将などをも、そのまゝ守貞直といふものが、大勢で参つた。今はたゞ何方がとも仰せられやらず、とらへ方がないから、敵の為に御詮身をまかせて終つた有様である。

◎ままもなく宇治に行幸なさり上給へた大将軍の陸奥かと出心なふずも連れられて御いたなどいふのも一酒りの言ひ方で、それ以上のつゝまも自分の部下の武士どもも無くて、たゞ目を見合はせて、どうしよらかと呆然としてゐた。具行藤房忠顕少将などをも、そのまゝ守貞直といふものが、大勢で参つた。今はたゞ何方がとも仰せられやらず、とらへ方がないから、敵の為に御詮身をまかせて終つた有様である。

◎深きつゝらをり。深山の羊腸たる坂路。つゝらをゝ」は、九十九折とも、丸折とも書く、坂路などの曲多き意。◎木戸。いりロ、即ち城門。◎さかもゝ木、逆茂木の意。枝の葉つてゐる木を逆に立て、垣の如く編んで敵を防ぐに用ゐるもの。◎投石。石を投き飛ばして敵を射殺すに用ゐる昔の武器。之は銃などの発明せられない時代には重要な飛道具で、我国では此武器を用ゐた事が神功皇后紀に見え、雨寒源平時代から室町時代の中頃まで用ゐられた。◎さりとも。大事が攻め寄せても。◎今はいかゞせむにて。今となつては、何としようぞ、降方ないといふので。◎ただとり出でさせ給ふ。道を探し求めて出られる。◎はかなげなる御有様。かよわい御有様。頼み少い御有様。◎柿木がたち。赤坂城。◎行幸もそなたざまにやと。行幸も赤坂城の方へ成りにならうかと。◎ほのぼの。火焔。◎夢とだに思ひもわかず。夢といふ程すらも分別がつかない。分別のつかぬボンヤリしてゐる有様をいふ。◎少しの引きせ給ひて。少し遠ざのびなされて。◎御心ちも損はれて。御心も疲労して。◎誠にあやふく見えさせ給ひぱ。如何にも困難なやうにお見えなさつたよ。◎たかまの山。高の市（タケチノヤマ）山の事で太平記に、「山城多賀の郡なる有王山の麓まで送りさせ給ひけり云々。」とある有

王山はこの中山のことである。◎御心ちをためらふ所に。御心の疲労を休めようと、進まずに躊躇してゐられる所へ。◎深堀の主馬入道。敵の武士である。◎まりかゝりて。来寄つて。◎案内聞えたるしも。道案内をなし奉つたのも。即ち、主上を捕へてお連れ申したことをいふ。◎めざましう。心外なこと。◎上達部。主上の御供に仕へた重役具行忠顕等をさす。◎思ひやるかたなくて。思ひをやる方がなくて。非常に悲しい有様をいふ。千載集に、「歎けれは思ひやるべき方ぞなき、春のなごりの夕暮の空。」などあるも同じ意。◎雑賀守貞道。北条時政六世の孫、民部少輔大弗宗兼の子。◎ともかくもの給ふべき云々。何とも仰せられやうがないから。◎御心にもあらでひかれ云々。御心から進んで行かれるのでなく、敵の為に連れられて御出かけなさるに依つて。「程に」は、間に、まに、に、に依つてなどの意。◎おのが手のものどもに囲ませつゝ。自分の部下の武士共に囲ませて連れ行かせた。◎御輿のしりに走りおくれて。御輿の後の方に走りおくれて。◎事のよし云々。事の顛末を六波羅へ注進したので、六波羅から何分の沙汰のあるまでの間は宇治に御滞在せられたのである。◎実もとはしがは。絵巻がやゝ進めて画の盛り出しさうな型合をいふ。今にも画の盛り出しさうな気組の形容。◎あゝらは行幸ならはと。このやうに敵の為に擁されて実をするのではないならば、どんなに自然お見送しなさる紅葉をつけても、このやうな行幸に事が多く、涙を誘ふさまで空の様子までも時雨する日の御話すのは九月三十日の出来事であるから、一二日間其儘に御逗留なされる。かの大納言入道師賢は、主上御輿の後に走りおくれてやかくと護送してゐられた。主上をば宇治の平等院へお入れ申し、事の様子を六波羅へ注進して、此度敵の為に、それも発見されて捕

王山はこの中山のことである。◎御心ちをためらふ所に。御心の疲労を休めようと、進まずに躊躇してゐられる所へ。◎深堀の主馬入道。敵の武士である。◎まりかゝりて。来寄つて。◎案内聞えたるしも。道案内をなし奉つたのも。即ち、主上を捕へてお連れ申したことをいふ。◎めざましう。心外なこと。◎上達部。主上の御供に仕へた重役具行忠顕等をさす。◎思ひやるかたなくて。思ひをやる方がなくて。非常に悲しい有様をいふ。千載集に、「歎けれは思ひやるべき方ぞなき、春のなごりの夕暮の空。」などあるも同じ意。◎雑賀守貞道。北条時政六世の孫、民部少輔大弗宗兼の子。◎ともかくもの給ふべき云々。何とも仰せられやうがないから。◎御心にもあらでひかれ云々。御心から進んで行かれるのでなく、敵の為に連れられて御出かけなさるに依つて。「程に」は、間に、まに、に、に依つてなどの意。◎おのが手のものどもに囲ませつゝ。自分の部下の武士共に囲ませて連れ行かせた。◎御輿のしりに走りおくれて。御輿の後の方に走りおくれて。◎事のよし云々。事の顛末を六波羅へ注進したので、六波羅から何分の沙汰のあるまでの間は宇治に御滞在せられたのである。◎実もとはしがは。絵巻がやゝ進めて画の盛り出しさうな型合をいふ。今にも画の盛り出しさうな気組の形容。◎あゝらは行幸ならはと。このやうに敵の為に擁されて実をするのではないならば、どんなに自然お見送しなさる紅葉をつけても、このやうな行幸に事が多く、涙を誘ふさまで空の様子までも時雨する日の御話すのは九月三十日の出来事であるから、一二日間其儘に御逗留なされる。かの大納言入道師賢は、主上御輿の後に走りおくれてやかくと護送してゐられた。主上をば宇治の平等院へお入れ申し、事の様子を六波羅へ注進して、此度敵の為に、それも発見されて捕

愉快であらうかと思はれて、面白うありません。後冷泉院かと記憶するよ、宇治に行幸なされて、三四日間逗留なされたが、その當時の人の心持は、身分の高いものも卑いものも、共に何事を心配しようぞ、何事も屈託などありはしまいと想像されて、羨しく哀れに感ぜられる。

【通釋】

十月三日に都へ御入りなさるにつけても、平素思つてゐた事とは違ひ、甚だ恐しさうな武士どもが、衙府の佐のやうなやうすで、主上の御輿近くを取り圍んでゐる。御乘物には、ある可からざる網代輿の粗末なのを奉つて、それに、お乘せ申上げた。六波羅の檜皮屋にも、始めから後伏見花園の兩院と東宮とが居られたから、南方の板屋の至極粗末なのに、室の飾付けなどして、其處にお置き申上げるのも、お氣の毒に勿體ない。(近い處で、いろ〳〵の事をお聞きになり、御覽になるについても、どうしてか御感慨のない事があらうぞ。殘念に思召して御心が亂れる。住みなれない住居に、時雨の音までも拍子わる〳〵聞えて、お讀み遊ばした御歌。

十月三日都へ入らせ給ふも、思ひしにかはりて、いとすさまじげなる武士ども、衙府のすけの心ちして、御輿近くうちかこみたり。鳳輦には、あらぬ網代輿のあやしきにぞたてまつれる。六波羅の北なる檜皮屋には、もとより兩院東宮おはしませば、南の板屋のいとあやしきに、御しつらひなどしておはしますも、いとほしうかたじけなし。間近きほどによろづきこしめし、御覽じふるゝ事ごとにつけても、いかでか御心動かぬやうはあらむ、くちをしうおぼしみだる。ならはぬ御宿りに、時雨の音さへはしたなくて、

まだなれぬいたやの軒のむら時雨、
音をきくにもぬるゝ袖かな。

◎思ひしにかはりて。行幸に對して平素持つてゐた考とは變つて。◎すさまじげなる武士。輿のさめるやうな武士。「すさまじ」は「すさむ(進む)」の反對、心のすゝまぬこと、面白くないこと。◎衙府のすけの心ちして。衙府は、左右近衛、左右衛門、左右兵衛をいふ。「すけ」は、次官のこと、近衛は中將少將をいひ、衛門兵衛は佐をいふ。衙府のすけは行幸の折の供奉官である。◎鳳輦。天子のお乘りになる輿の一種、屋形の上に金鳳を据ゑてあるので、鳳輦といふ、また一名鸞輿ともいふ。之は最重大な節會行幸の時に用ゐるのが恒例である。◎あらぬ。思ひ掛けない、ある可からざるの意。この語を、「鳳輦には」をうけてゐるものとして、

◎後冷泉院かとよ。治暦三年十月十五日に、後冷泉院が平等院に行幸せられ、遊興を盡して、同月十七日に還御せられた事談をいふ。◎その世の人の心ち。其時代後冷泉院に供奉して平等院に遊んだ人の胸中をいふ。◎上下何事かは。「上下何の高貴な人も卑賤な人も共に何事を心配しようぞ。「かは」の次に「思はん」といふ句を略してある。身分はれてといふ意。◎あはれにおぼさる。自分の今の身の上を哀れに悲しく御思ひになるといふ意。

中務の宮は、正成がもとにおはしましつれど、御門のかくなら
せ給ひぬれば、今はかひなしとて、それも都へ入らせ給ひて、
佐々木判官時信といふものの家にわたり給ひぬ。つれ〴〵と物
思ふ時雨かな。

【通釋】
中務の宮良親王は、正成がもとにおはしましつれど、主上が六波羅に幽閉
せられましたから、今はかひなしとて、親王は都へお入りになつて、佐々
木判官時信といふ者の家に御出で遊ばした。

【語釋】
○中務の宮良親王　後醍醐天皇の皇子。○正成　楠木正成。○御門　後醍醐天皇。○佐々木判官時信　六波羅探題北條仲時の家臣。○つれ〴〵と物思ふ時雨かな　「ふる」は「降る」と「経る」との掛詞。「時雨」は「ふる」に縁語。「ながめ」は「眺め」と「長雨」との掛詞。「ながめ」は「ふる」に縁語。

この御子は、藤大納言爲世の孫にてもし給へば、かの家に常
はすみ給ひしほどに、大納言のすゑの女、大納言の典侍と聞ゆ
るに御覽じつさて、その御腹に姫宮などいでき給へり。又中宮
の御匣殿は、宮の御せうとの右の大臣公顯と聞えし御女なり。
その御腹にも男御子などおはします。思ふやうなる世をも待ち
給はんと、誰も行く末たのもしく思ひ聞えつるに、かくお
もひの外にあさましき事の出できぬるを、深う思ひなげく人々
かず知らず。御匣殿はらせ給ひしかば、この頃は、たゞこの典
侍の君をのみたなさきものにおぼしかはしつるに、昨きかと風

おぼしみだるゝより外の事なし。

世のうさを空にもしるや神無月、
ことわりすぎてふる時雨かな。

【通釋】
この御子は、藤大納言爲世の孫にてもし給へば、かの家に常にすんでおいでになつたから、大納言の典侍と申す方に御目に掛つて、その御腹に姫宮などがおでき遊ばした。また中宮に奉仕してゐた御匣殿に男御子がおでき遊ばした。

【語釋】
○藤大納言爲世の孫　爲世卿の御孫であらせられ、爲世卿の家に平素はお住まひ遊ばした間に、大納言の末の女大納言の典侍と申す方に御目がとまつて、その御腹に御子がおでき遊ばしたのである。○御匣殿　中宮に奉仕してゐた女官。○公顯　洞院公賢の父。○世のうさを空にもしるや神無月、ことわりすぎてふる時雨かな　世の中のつらさを空にもしるのであらうか、神無月、ことわりすぎて降る時雨かな。

おぼしみだるゝより外の事なし。

世のうさを空にもしるや神無月、
ことわりすぎてふる時雨かな。

この御子は、藤大納言爲世の孫にてもし給へば、かの家に常
はすみ給ひしほどに、大納言のすゑの女、大納言の典侍と聞ゆ
るに御覽じつさて、その御腹に姫宮などいでき給へり。又中宮
の御匣殿は、宮の御せうとの右の大臣公顯と聞えし御女なり。
その御腹にも男御子などおはします。思ふやうなる世をも待ち
給はんと、誰も行く末たのもしく思ひ聞えつるに、かくお
もひの外にあさましき事の出できぬるを、深う思ひなげく人々
かず知らず。御匣殿はらせ給ひしかば、この頃は、たゞこの典
侍の君をのみたなさきものにおぼしかはしつるに、昨きかと風

にのむら時雨、音をきくにもぬるゝ袖かな。

まだなれぬいたやの軒

【通釋】
まだなれぬいたやの軒にのむら時雨、音をきくにもぬるゝ袖かな。

【語釋】
○まだなれぬ　歌意、まだ住み慣れない板屋の軒に降りかゝる村時雨の音を聞くにつけても、我身の上が悲しく淋しくて、涙に濡れる袖であるわい。○むら時雨　ふら〳〵に降る時雨。此歌、新撰萬葉集には「ふる」、「袖」は「ながめ」と「長雨」との掛詞。「ながめ」は「ふる」に縁語。「ながめ」は「眺め」と「長雨」との掛詞。「ながめ」は「ふる」に縁語。

も間近きほどとにはおはすれど、御對面は思ひもよらず。おぼつかなさの慰むばかりなる御消息などだに、通ふこともかなはぬ御有樣を、あはれにいぶせうおぼしむすぼほれたり。

◎佐々木判官時信。時信は檢非違使左衞門尉である。左衞門尉顯綱の三男。判官は檢非違使の尉をいふ。◎わたり給ひぬ。御出でになつた。◎つれ〴〵と物おぼしみだるゝより云々。怠屈で、心配に心の亂れる事以外には何事もない。此句の次に、「かくて讀める歌」といふ句を省略してある。◎世のうさを。歌意「此世のつらい世であるといふ事を空も知るてあらうか。この十月空は、道理といふにも過ぎて甚だしく降る時雨であるわい。神無月は十月のこと、此月を時雨月とも言うて、時雨のふる月としてある。この歌も新葉集雜上に見えてゐる。◎藤大納言爲世卿の女爲子の腹に出來た方である。◎御覽じつきて。お目にとまつて。◎中宮の御匣殿。中宮に仕へてゐた御匣殿の別當のこと。◎宮の御せうと。後醍醐帝の中宮禧子（後に禮成門院といふ）の兄公顯のこと。從一位太政大臣實泰の二男。◎男御子など云々。中務の宮との關係で出來たのである。◎思ふまゝなる世を云々。中務の宮尊良親王が皇位に卽かれて、思ひ通りなく愛らしいものにお思ひになつて愛し合うてゐたのに、與侍の君とは、風も吹き通ふほどの間近い處にお出で遊ばしながら、御對面は、思ひも寄らぬ事で、不安に思ふ心の慰むくらゐな一寸した御便りなどすら、やりとりする事の出來ない御有樣を、宮は身にシミ〴〵と辛氣臭く感じて、憂慾に胸が結ぼれてゐます。

【通釋】

尊良親王と御同腹である天台座主の尊澄法親王も、長井の高廣とかいふ者が、お預り申上げました。主上が遠島にお遷りなさるであらう間は、こ

に世の中をお治め遊ばす御代を待ちつけなさるならば、どんなに一家の繁榮を增すことであらうかと考へて。「待ちいづ」は其時期を待つて其時に遭ふ意。尊良親王は後醍醐帝の第一皇子である。◎與侍の君を……おぼしかはしつるに。尊良親王は大納言與侍をの御方

の皇子がたも、各々散り散りバラ〳〵に流されるであらうなど評判した。東宮は世間を憚つて、六波羅にお出で遊ばされる。先帝の後醍醐天皇は、朝敵のために、東宮と同じ住居に、葦垣だけを隔てにして御住ま ひ遊ばすから、主人の居ない院の御所の内は、甚だ淋しくて、衞士の焚く火も影すら見えない。禁中には何時の間にか異樣なものが住み込んで、或時は紅の袴を長々と引き垂れて火を點じた女が、見てゐるうちに、其身の丈は軒と同じ高さになつて、後には姿を消してなくなり、葦垣ばかりをへだてにておはしませば、ぬしなき院のうちいとさびしくて、衞士のたく火もかげだに見えず。內にはいつしかけしかるものなどすみつきて、ある時は紅の袴長やかにふみたれて、火ともしたる女、見るまゝに丈は軒とひとしくなりて、後にはかきけち失するもあり。又いみじう光を放ちて、髮を前にみだしかけたる童なども見えけり。鬼殿などはかくやありけむとおそろし。人すまて年經あれぬる所などにこそ、かゝる事もおのづからありけれ。僅に一月二月の中にかゝるべきにはあらぬを、これかれいと怪しきわざなるべし

◎長井の高廣。太平記に、「同日（三月八日）妙法院二品親王をも、長井左近大夫將監高廣を御警固にて、讃岐國へ流し奉る。」とある。◎御門遠くうつらせ給はむほど。主上が遠島にお遷りなさらう間は。◎この御子達も云々。尊良尊澄の兩法親王も各々バラ〳〵に流されるであらうといふ意。太平記に、「三月八日、一宮中務卿

つて終ふ事もある。また或時は、ひどう光を放つて、髮を前方に亂して垂れかけてゐる童なども見えた。鬼殿などは此樣であつたらうかと思はれて恐しい。人が住まないで年を經過し、荒れはてゐる場所などにこそ、このやうな事も自然あつたらうが、僅か一月二月の間に鬼などの住む筈ではないものを、斯く妖怪の出現するのは、かれこれ考へて見ると、甚だ不思議の事であらう。

【通釋】

さて例の如く鎌倉から御使が上洛した。歷代の慣例であるとかいうて、秋

親王をば、佐々木判官時信を路次の御警固にて、土佐の畑へ流し奉る。」とある。◎世をつゝしみて。世間の人の心を憚念して。危難を受けぬやうに身を愼んで。◎同じ御やどり。後醍醐帝は六波羅の南方に、東宮と同じ場所に住まはれたのである。卽ち主上院。今までの皇居なる二條富小路殿のこと。◎ふみたれて。引き垂れて。◎見るまゝに。見てゐる中に。◎鬼殿。鬼の住んでゐる家。◎一月二月の中に。後醍醐帝が笠置へ行幸せられたのは八月廿四日のことであるから、十月の半までは僅に二月に滿ちない。◎かゝるべきにはあらぬを。鬼などの出る筈ではないのに、斯く妖怪の現れるのは。此句の次に、「怪しきものゝ現るゝは」といふ意の句を補うて解く。◎これかれ。「すべて」といふ程の意。土佐日記に、「かれこれ知る知らぬおくりす。」などあるも同意。

さて例のあづまより御使のぼれり。代々のためしとかやとて、秋田の城の介高景、二階堂出羽の入道道雲とかやいふものぞ參れる。西園寺大納言公宗に事のよし申して、東宮御位につき給ふ。さるべき御事といひながら、今日あすとは見えざりつるに、

田城介高景と二階堂出羽入道道蘊とかいふ者が參つた。西園寺大納言公宗卿に事の趣を申上げて、東宮が御位にお即きなさる。さうある筈の事とは言ふものゝ、今明日御即位があらうとは思はれなかつたのに、かく位に備はられたのは至極結構である。さて六波羅から、今度は通常の行啓の儀式で、持明院殿へ御入りなさる。後伏見花園の兩院も、威儀を正した嚴かな御幸の由緒である。行啓や御幸だといふて、從者共の騒々と押合うて騒ぎ立つ世間の噂を御聞きになる後醍醐帝の御心持は

いとめてたし。さて六波羅より、この度は世のつねの行啓の儀式にて、持明院殿へ入らせ給ふ。兩院もひきつくろひたる御幸のよしなり。ひしめきたちぬる世の音なひを聞しめす先帝の御こゝち、たとしへなくねたく人わろし。もとの内裏へ新帝うつらせ給ふ。上達部のこりなく仕う奉らる。院も常磐井殿へおはしまいて、世の政事聞しめせば、後宇多院のむかし思ひ出てられてあはれなり。いつしか十月十二日綸旨下されて、前の御代の人々、大中納言宰相すべて十人、宣房、公明、藤房、具行、隆資、實世、實治、季房、隆重、忠顯、つかさやめらるゝよしきこゆるも、昨日までの時の花と見えし人々、つかのまの夢かとあはれなり。かゝるにつけては、一つ御ぞうのみ今はわく方なく定まり給ふべきかと、世の人も思ひ聞ゆる程に、龜山院の御流の

聞へやうもない程ねたくしくて、人の見る目も恥しく惑ぜられる。元の内裏へ新帝はお遷りなさる。上達部は全部御供を申される。後伏見院も常磐井殿へ御出でになつて、天下の政務をお聽きになるから、後宇多院が昔宵磐井殿で院政をおとり遊ばした時の事が思ひ出されて、哀れである。何時の間にか十月十二日に詔勅を下されて、後醍醐帝の御代に仕へた人人、大中納言宰相等凡て十人、即ち宣房、公明、藤房、具行、隆資、實世、實治、季房、隆重、忠顯等が、官職を解かれ

絶ゆべきにはあらずとにや、邦良先坊の一の宮康仁を太子に立て奉る。御乳母の雅藤の宰相の法性寺の家に渡らせ給へるを、土御門高倉の先坊の御跡へ入れたてまつりて、十一月八日坊に定まりたまふ。今は思ひたえぬる心ちしつるに、いとめてたし。松が浦島に年經給ひぬる入道の宮も、御親の心ちにてゐはしますべければ、太上天皇になずらへて、崇明門院ときこゆ。よろづ斧の柄朽ちにしむかしを改めたる宮のうちなり。あやし後、おのがさまざまかて散りにしふる女房上達部殿上人など、世の中屈じいたくて、こゝかしこに籠り居たりしも、いつしかと參りつどふさま、谷の鶯の春待ちつけたる心ちして、いとたのもしげなり。傳には久我の右大臣長通、大夫には中院の大納言通顯なり給ふ。なべて世に年ごろうづもれたりし人々、いつしかと、つ

かさ位さま〳〵に思ひのまゝなる氣色ども、目の前にうつりかはる世の有樣、いまさらならねど、いとしるくけちえんなるも、あぢきなし。かくて年もくれぬ。

◎代々のためし云々。代々皇位繼承に關しての上洛の使には高景道雲二家の者のなるのが常例であるとか言うての意。後嵯峨天皇踐祚の使に秋田城介義景の上洛した事は「三神山」の卷に見えてゐるが、其時出羽前司行義も共に使者として上洛したのである。高景道雲の二人は共に義景行義の後裔である。◎東宮御位に云云。皇年代略記、「元弘元年辛未九月廿日癸巳踐祚、（十九、被レ下二太上天皇詔命一、于レ時劔璽不レ渡レ之、壽永之例也）十月六日、渡二劔璽一、（自二六波羅一奉レ渡二土御門東洞院皇居一、或說、神璽聊有二子細一云々）」◎世のつねの行啓の儀式。通常の行啓の儀式。行粧を略すやうな事がなく、普通泰平の時の行啓の儀式。◎ひきつくろひたる御幸のよしなり。威儀禮容を正した嚴かな御幸であるとの趣である。「世の常の行啓の儀式」といひ、「ひきつくろひたる」といふは、皆前に「かばかりのきはには、何の儀式もなかるべし。」とある句を受けて言いたのである。◎ひしめきたちぬる世の音なひ。御幸行啓などいうて、人々の隙間なく立籠み騷ぐ世間の響。

で遊ばされてゐるのを、土御門高倉にある邦良親王の居られた御跡へお入れ申上げて、十一月八日に皇太子にお定まりなさる。今は登極の希望は絕えて終つた心持がしてゐたのに、かく太子に立たれたのは甚だ結構である。尼宮で年を經過して居られた入道の宮祿子內親王も、御親であるやうな心持で御出でになるであらうから、太上天皇に准じて崇明門院と申上げる。萬事斧の柄の朽ちたが如く、世間から捨てられて居つた淋しげな以前の有樣を改めたといつたやうな宮の內の御有樣で

◎たとしへなく。譬へやうもない程に。◎ねたく。うらやましく憎く思ふ意。◎人わるし。外聞がわるい。◎もとの內裏。土御門東洞院殿のこと。◎後宇多院のむかし云々。昔後宇多院が常寧井殿で院政をお取りになつた時の事が思ひ出されて、大覺寺統と持明院統とが其地位を更へたのが、身に沁みて深く感じるといふ意。◎綸旨。詔勅。禮記、「王言如レ絲、其出如レ綸」貞丈雜記、「職事（藏人頭）の方より上卿に下知する狀を口宣案と云也、右の如く職事上卿に下知する時、口宣の趣を受て上卿より外記に下知する狀を宣旨と云也、右に云ふ如く上卿より外記へ下知する時、宣旨の趣を受て書て出す狀を綸旨と云ふ。」◎前の御代の人々。後醍醐帝に近く奉仕した人々。◎隆重。四條少將隆量の誤であらう。◎時の花。時を得て榮える意。君寵を得て繁榮する意。◎つかのまの夢。暫時の間の夢。「つか」は指四本並べた長さで、短い意にいふ。又一說に、つかは一握り程の極僅少な意であるともいふ。◎一つ御ぞうのみ。持明院統の御一族だけで。◎わく方なく。他系の人に皇位の別れる事なく。◎今は思ひたえぬる心ち云々。邦良親王薨去の後、量仁親王が皇太子に立たれたから、康仁親王は自分が皇位に卽くといふ希望は、今は絕えて終つた心持がしたのに、坊に定まつたのはといふ意。◎松が浦島。陸前宮城郡菖蒲田濱の西南に隣れる松濱の古名。後撰集雜に、「西院のきさ

ある。邦良親王が薨去された後、各自銘々に退散した古女房や上達部殿上人などの、世の中をばひどく面白からず思うて此處彼處に籠つて居つたのも、いつの間にか參集して來る有樣は、恰も谷間に隱れてゐた鶯の春を待ちつけて里に出るやうな陽氣な心持がして、甚だ賑もしい樣子である。傳には久我右大臣長通、大夫には中院大納言通顯がなられる。一般に年來世間に埋もれて不遇であつた人々が、いつの間にか官位など續々に思ひ通りになる樣子など、眼前に變轉する此世の有樣が、

き、おほんぐしおろさせ給ひて、おこなはせ給ひける時、かの院の中島の松をけづりてかきつけ侍る、素性法師、『昔にきく松が浦島けふぞ見る、うべ心あるあまもすみけり。』とある歌から、尼宮の御出でになる所をいふ。歌意は、松の生えてる中島を、松が浦島に比し、喪を尼にとりなして、西院の后の佛道修行のさまをおほめ申したのである。◎入道の宮。邦良親王の御息所なる謀子內親王のこと。◎斧の柄朽ちにしむかし云々。列仙傳に、「王質晉衞州人也、入レ山伐レ木、至二石室山一見二石室中一有二數童子圍レ棋、質置レ斧觀レ之、童子以二物如一棗核一與レ質、令レ含レ之、其汁一便不レ覺レ飢渴一、童子云、汝來已久可レ還、質取レ斧、柯爛已盡、質丞還レ家、已數百年、親舊無二復存者一、復入レ山得レ道、人往々見レ之。」とある晉の王質の故事から、斧の柄の朽ちた如くに、世間の人から忘られて居つた淋しい昔の有樣を改めた宮の內であるといふ意。◎ありし後。邦良親王薨去の後。◎ふる女房。年老いた女房。◎世の中屈じいたく。「世の中いたく屈じて」の意。世の中をば甚だしく鬱に思うて。「屈ず」は、氣屈して心の引立たない意。◎谷の鶯の云々。谷間に籠つてゐた鶯が春を待ちつけて、皆里へ出て來て樂しく囀る時のやうな陽氣な心持がして。◎傳。東宮職の長官。皇太子を補佐する役。令に、「傳一人、掌下以二道德一輔中導東宮上。」とある。◎大夫。春宮坊の長官。是は攝政大臣たる人の子孫で大

今新しい事ではないが甚だ著しくあらはであるのも、なさけない。このやうにして年も暮れた。

【通釋】

元弘二年の春にもなつた。新しい御代の年始には、人の思はくまでが華やかである。主上も年若く綺麗であらせられるから、萬事結構で、禁中の諸儀式は何事も從來と變らない。然るべき公事のある折々は勿論、或はさうなくても、院と內裏とが同じ陣の中で、院へ何

中納言の官にある人が兼任する例である。◎久我の右大臣長通。太政大臣久我通雄の子。◎大納言通顯。內大臣中院通重の子。◎うづもれたりし人々。用ゐられなかつた人々。不遇で居つた人々。◎いまさらならねど。今新しい事ではないが。

第十九　久米のさら山

元弘二年の春にもなりぬ。新しき御代の年のはじめは、思ひなしさへはなやかなり。うへも若うきよらにおはしませば、よろづめでたく、百數の內何事もかはらず、さるべき公事のをりをり、さらでも院內おなじ陣の中なれば、一つに立ちこみたる馬車、隙なくにぎはゝしけれど、見し世の人はひとりもまじろはず、參りまかづる顏のみぞかはれる。先帝はいまだ六波羅におはします。二月の頃、空の氣色のどやかにかすみわたりて、ゆ

るらかに吹く春風に、軒の梅なつかしくかをりきて、鶯の聲うらゝかなるも、うれはしき御心ちには、ものうかるねにのみ聞へらる。「長き日かげも、いとゞくらし難き御なぐさめにとや聞え給ひけむ、中宮より、御琵琶奉らせ給ふついてに、いさゝかなる物のはしに、

思ひやれ塵のみつもる四つの緒に、
はらひもあへずかゝる涙を。

げにとおぼしやるに、いとかなしくて、玉水のながるゝやうになむ。御かへし、

かきたえしねをたちいでて君こふる、
涙の玉の緒とぞなりける。

上陽人の宮の中が思ひくらべられる。春の永い日かげも一層暮し難いお慰めにといふので申上げたのであらうか、中宮から御琵琶を差上げまする序に、一寸した紙のはしに、次の歌をお書きになつて奉られました。

思ひやれちりのみつもる四つの緒に、はらひもあへずかゝる涙を。

後醍醐帝は此御歌を、いかにもと御心に感じて、中宮の御胸中を想像なさるにつけ、大層悲しくて、涙の流れるのが恰も雨だれの落ちるが如くである。かくて、次の御返歌を讀まれた。

◎久米のさら山。巻名は、後醍醐帝の御製、「聞きおさし久米のさら山越え行かむ、道とはかねて思ひやはせし。」といふのに因つて附けたもの。◎若うきよらに。年若く綺麗で。此時光嚴帝は御年二十であらせられた。◎何事もかはらず。朝廷で年の始に行はせられる恒例の公事どもは以前と變らずに執行はせられるといふ意。◎さらでも。然るべき公事のある時でなくても。◎おなじ陣の中。主上の居られる二條富小路殿と、院の住はれる常磐井殿とは共に間近い處にあつて、殊に常磐井殿に衞府の陣を置いてあつた爲に、兩者共に同じ陣の廓内にあつたのである。◎一つに。一所に。同所に。◎見し世の人。後醍醐帝時代の人。前の時代の人。◎まじろはず。「まじらはず」の誤。◎まかづる。退出する。「まかづる」は「罷出づる」の約つたもの。◎ゆるらか。緩々と。◎うれはしき御心ち。嘆かはしい御心持。◎ものうかるねね。ものおもしろからぬ夜。「ものうし」は心晴れやかならずものぐさい意、氣の進まぬ事、不快な事。然し單に「憂し」といふ意を「ものうし」と言うてあるのもある。古今集に、「春立てど花も匂はぬ山里は、物うかる音に鶯ぞなく。」などあるは氣の進まぬ意、詞花集に、「山里は柴の立枝に吹く風の、音聞く折ぞ冬は物うき。」などあるは、單に「憂き」といふ意。◎上陽人の宮の中思ひよそへらる。昔支那

の唐時代に、上陽宮の宮殿に起臥して、君恩の薄きを嘆き、昔日の寵に狃れて秋夜長、夜長無レ寐天不レ明、耿々銀燈背レ壁影、蕭々雨滴打レ窗声、の明け暮れを恨んで、一生を過つた婦人があるが、その婦人の居られた淋しい宮の中の様子が心に思ひやられる。勿論、上陽宮に居た婦人は君恩の薄い為に君に逢ふ事が出来ずに、空房に起臥したので、後庭前帝の六宮殿の南方に門閉さ れて物淋しく暮して居られるのとは事情が違つて居るが、同り空しく日を暮して ゐる点に於ては同じである所から、かゝる比較したのである。前に「こゝやうなれど」と断つたのは、両者の比較が不釣合な条件なものであるからである。白氏文集「上陽白髪人」の詩「上陽人、紅顔皓歯入二宮門一、閉二上陽一時年十六、今年六十、同時采選百余人、零落年深残命在、偶然一得二天恩一、多少春愁不二堪説一、憶初選入、入時十六今六十、同時采選百余人、零落年深残命在、偶然一得二天恩一、昔呑レ悲明二親族一、扶二入車中一不レ敢レ哭、皆云入レ内便承レ恩、脂粉顔色新、専レ寵驕二六宮一、未レ容二君王得一見一面一、已被二楊妃遠嫉一目、新年二選配一上陽宮一、一生遂向二空閨一老、秋夜長、夜長無レ寐天不レ明、耿々銀燈背レ壁影、蕭々雨滴打レ窗声、春日遅、日遅遅、坐天達レ暁、宮鶯百囀愁レ聞レ、梁燕双栖老休レ新、鸚鵡能言巧人情、不レ及二籠中一解レ鳴レ、唯向二深宮一説二明月一云々。」上陽白髪人の註に、「天寶五載已後、楊貴妃専レ寵、後宮人無二復進幸一矣、六宮有二美色一、輒置二別所一、上陽是其一也、貞元中尚存焉。」とある。上陽は上陽宮のことで、其宮の中に居る者を上陽人といふのである。

かきたえしれをたちいでて君にふる涙の玉の緒とぞなりける

◎いさゝかなる物のはしに。一すこした物の一端に。◎思ひやれ 事が、あなたが居られなくなつてからは、筆紙を費してお慰め申す術もないから、久しく手も觸れなかつた琵琶には塵が積つて居りますが、今その塵のつもつてゐる琵琶を取出して見ると、昔の事などが思ひ出されて、悲しさに胸が込み上げて、琵琶の上に伸らしても伸びやせないほどに涙が流れかゝります、この私の悲しい情を御推量下さい。「四つの緒」は琵琶の弦のこと、琵琶の弦は四筋ある所からこう言ふのである。新撰古今「弓張のなかばの月の影よりも、細くみえこす四つのをの声」◎玉水のながるゝやうになむ。涙の流れ落ちるのが、雨雫の流れ落ちるやうに甚しい。「玉水」は雨滴のこと。◎かきたえし。歌意、昔は共に琵琶を弾奏して楽んだが、自分があなたにお別れしてからは、久しく弦を立てる事も絶えて居つた、其琵琶を今また手許へ取寄せてみたので、其を眺めては、其は昔を思ひ出し、其方を思ひ慕ふ情に堪へられないで、それが為に此琵琶の弦は其方の悲しさに流す私の涙の玉を貫き通す所の緒となつた事である。一本に「かきたてし音をたつねは

【通釋】

かの承久の亂の例といふのであらうか、鎌倉からの御使に上洛せられたのは、長井の右馬助高冬といふ者であらう。此者の家系は賴朝の大將の時から、鎌倉で重んぜられた武士で、高冬は未だ年若いけれども　このやうな大事にも上洛させたと云ふことである。遂に後醍醐帝をば隱岐の國へお遷し申さうというて、三月初旬の七日に都を御出發なさる。今は都を立ち離れねばならぬと、御聞きなさる御心惡ひの甚しさは、いふまでもない。女院、中宮、親王がたの所所での御悲嘆、さては天皇の御側近くお仕へ申した人々の心持などは、心の落着き場所も無い程に悲しい。後醍醐天皇も此上なく御心を痛める事であらう。このやうにひどう悲しみに暮れるのをば人に見られまいと、一方には思ひ鎭めるけれど、意地惡く湧み出る御涙をば、うち隱し〳〵していらつしやる。承久の昔の事を思ひ出すにつけても、都に立返つて、再び天下を安らかにお治めなさらん事は、非常に六ケ敷い事に思はれるから、

てて」とある。

かの承久のためしにとや、あづまより御使には、長井の右馬助高冬といふものなるべし。これは賴朝の大將の時より、鎌倉に重きものゝふにて、いまだ若けれども、かゝる大事にものぼせけるとぞ申しける。遂に隱岐國へうつし奉るべしとて、三月のはじめの七日に、都を出てさせ給ふ。今はと聞しめす御心ども、いへばさらなり。所々のなげき、近うつかまつりし人の心ちども、おきどころなくかなし。御門もかぎりなく御心惱むべし。いとからしき人は見えじと、かつはおぼししづむれど、あやにくにすゝみ出づる御涙を、もてかくしつゝおはします。ふりにし事をおぼしいづるにも、立ちかへりまた、世をやすくおぼさむ事のいとかたければ、よろづ今をとぢめにこそとおぼ

しめぐらすに、人やりならずうちをしき契り加はりける前の世のみぞ、つきせずうらめしき。

つひにかく沈みはつべきむくいあらば、うへなき身とはなにうまれけむ。

日の時ばかりにいでさせたまふ。後宇多故院の御世より仕うまつりなれにしものども、あるかぎりまゐれり。御車寄に、西園寺の中納言公宗さぶらひたまふ。うへは、御冠に、世のつねの御直衣、指貫、白綾の御衣ひとかさね奉れり。こぞの今日は、北山にて花の宴せさせ給ひしも、あはれにおぼし出てられて、その日の事かきつらねてひしくおぼさる。人々の祿にこそはたまはせしを、今日は御旅衣にたちかふるも、あはれに定めなき世のならひ、今さらこゝろし。御

寓事今を最後と思ひめぐらされるにつけて、是も人のやらする事ではなく皆御自分の心からから、殘念な宿緣の加はつた前世のみが、限りなく恨めしく感じる。かくて讀まれた御歌。

つひにかく沈みはつべき報いあらば、上なき身とはなに生れけむ。

午前十時頃に御出かけなさる。綱代の御車に召され、御前駈などには、後宇多院の御代からお仕へ馴れてゐる者どもが世にあるかぎり參つた。御車寄に西園寺中納言公宗が伺候なさる。後醍醐帝は、御冠に、普通の御直衣、指貫、それに白綾の御衣一重ねを召して居られる。去年の今日は北山で花見の御宴を催された事をも、身にしみて思ひ出されて、その日の事をソレカラソレへと懇しく思ひ出しなさる。その時人々への祝儀に與へた御衣をば、今日は御旅の衣に作りかへて召されるのも、身に染み〴〵と浮世の習はしが、今更に辛く思はれる。御車にお召しなさらうとして、日ごろ居られた傍の障子に、次の御歌を御書きつけなさる。

車にたてまつるとて、日ごろおはしましつる傍の障子に書きつけさせたまふ。

いさしらずなほうき方のまたもあらば、

このやどとてもしのばれやせむ。

【通釋】

御供には內侍の三位殿、大納言、小宰相など、男には行房の中

◎かの承久のためしにとや。此句は、「遂に隱岐國へ」といふに懸つてゐる。◎右馬助。右馬寮の次官。◎今はと聞しめす御心まどひ云々。今は都を立ち別れればならぬと御聞きなさる時の御心惑ひの甚しさなどは話せば事あたらしい、いふまでもない事である。◎所々のなげき。所々に居られる女院中宮親王方の歎。◎おき所なく。心の落着き場所も無いといふ意。〇いとかうしも。たのやうにひどう悲みにくれてゐると。◎人に見えじ。人に見られまい。「見え」は「見られ」の意。◎おぼしづむ。思ひ鎭める。◎あやにく。意地惡く。生憎。◎もてかくしつゝ。うち隱しうち隱してといふ意。◎ふりにし事。永久の亂に三上皇が遠島へ流された折、再び都へ還る時がなくて、それ〴〵遠い土地で一生を終へられた事蹟。◎やすくおぼさむ事。安らかにお思ひなさる事。◎今をとぢめにこそと。今を仕舞ひにするのであると。とぢめは、終の意。◎人やりならず。人のやらせる事ではなく、自己の心からして。◎つひにかく。歌意、最後には斯く治落して身を終へる筈の應報があるならば、どうして天子といふ至上の身の上に生れたのであらう。卽ち、現世に於いてかく零落して世を果てるべき前世の應報があるならば、むしろ賤しい人間に生れて來ればよかつた、さうすれば治落の境遇をも今の身ほどには悲しく思はないだらうにといふ意。◎巳の時。今の午前十時頃。◎御前。供奉の人々をいふ。前駈。◎御車寄。車を引寄せて昇降する所。◎白綾の御衣。白の綾織で仕立て、直衣の下に着る服。◎かきつらね。それからそれへといふ程の意。「かき」は接頭語。「つらね」は列ねならべる意。◎人々の歌に云云。北山の花見の折には公卿や侍臣などへの祝儀に與へた御衣をといふ意。◎たちかふる。作りかへる。◎障子。襖障子。今の唐紙障子のこと。◎いさしらず。歌意、サアどうか知らん、今よりも一層つらい方面の事柄が此上再度とあるならば、此日頃、悲しい思ひに暮した此六波羅の家とても、懷しく思ひ出されもする事であらうか。

御供には內侍の三位殿、大納言、小宰相など、男には行房の中

大納言の君、小宰相など、男では行房の中將、忠顯の少將だけがお仕へ申上げる。各自皆別れゆく都の名殘が、言葉には言ひ盡せないほどに悲しい。六波羅からの御警固の武士は、警固の列に加はらないでも既に世に名ある武士ども、例へば千葉介貞胤を筆頭に、鎌倉幕府の氣に入つてる範圍の者十人を擇んで差上げる。其等の者どもの裝束は、色々の綾錦で作つた水干直垂などいふものを、樣々に織りつくし、染めつくして、大した立派な身なりをえり好んで調へてゐるから、かく遠

將、忠顯の少將ばかりつかうまつる。おのがじし都の名殘どもいひつくしがたし。六波羅よりの御迎への武士、さならでも名あるつはものども、千葉介貞胤をはじめとして、おほえ異なるかざり千人選びてたてまつる。いろ〳〵の綾にしきの水干直垂などいふもの、さま〴〵に織りつくし染めつくして、いみじき清らを好みとゝのへたれば、かくてしも世にめづらしき見物なり。六波羅より七條を西へ、大宮を南へ折れて、東寺の門前に御車をおさへらる。とばかも御念誦あるべし。物見車所せきほどなり。よろしき女房もつぼさうぞくなどして、かちの物どももうちまじれり。若きも老いたるも、尼法師あやしき山がつまで立ちこみたるさま、竹の林にことならず。おの〳〵目押し拭ひ鼻すゝりあへるけしきども、げにうき世のきはめは今につく

島配流の悲しい御幸であつても、まことに珍しい見物である。六波羅から七條通りを西へ進み、大宮通りを南へ折れて、東寺の門前に御車を駐められる。暫時御念誦なさるであらう。物見車が所も狹い程一杯に立ち並んでゐる。可なりな身分の女房も靈裝束などをして徒歩の者なども、交つてゐる。若い者も、年老いた者も、尼、法師、賤しい樵夫獵師までも、立ち込んでゐる有樣は、竹の林のやうである。各々悲しさに目を押し拭ひ、鼻を啜り合うてゐる樣子どもは、いかにも此世の終局

しつる心ちぞする。崇德院の讃岐におはしましけむ程のありさま、後鳥羽院の隱岐にうつらせ給ひけむ時なども、さこそはありけめなれど、音にのみ聞きて見れば知らず。これを始めたる心ちぞする。日ごろは何の御別れのあはれさは、なべておき所なければ身までも、今日の御別れのあはれさは、數ならぬ人及にぞ惑ひあへるかし。君も御簾少しかきやりて、このもかのも御覽じわたしつゝ、御目とまらぬ草木もあるまじかめり。岩木ならねば、武士の鎧の袖どももしほどけにぞ見ゆる。都のこずゑをかくるゝまで御覽じおくるも、猶夢かとおぼゆ。

◎おのがじし。「各自」の意。「おのれ〳〵」の意。貫之集、「おく霜の心やわくる菊の花、移ろふ色のおのがじしなる。」◎さならでも。「さにあらでも」の約言。さうでなくても。此度の後醍醐帝を警固申上げるといふ事に關係しなくとも、平素から名の知れた武士共といふ意。和泉式部、「さたらでも淋しきものを冬來れば鳥の

は今日で盡して終つたやうな心持がする。崇徳院が讃岐へいらつしやつたであらう時の有様や、後鳥羽院の隠岐に御・遷幸なされたであらう時なども、さぞ悲しくあつたらうが、それは評判にばかり聞いて、實際に目撃しないから分らない。今度の後醍醐帝の御遷幸が悲しい事の最初であるやうな心持がする。日頃は龍顔にも接しない、とるにも足らぬつまらぬ者や、かけても及ばぬ下等の者までも、今日の御別れの悲しさは、一般に心の落着き場所もない程に惑ひ合ひましたよ。後醍

垣の枯れ〳〵にして。」◎有ほえ異たるかきり。鎌倉執權の龍愛が勝れてゐる範圍の。◎直垂。もとは貴人の寢具であつたのが、後には武家の常服に用ゐるやうになり、狩獵軍陣などにも用ゐた。隨つて初めは絹の色目模様なども格別美しいものは用ゐなかつたが、狩獵軍陣などに着用するやうになつてから、綾錦で製するやうになつたのである。但武家では官位の卑い者は貴の直垂、布の直垂などを用ゐて、綾織物錦物等で製する事は無かつた。殊に錦の直垂は大將軍の地位でなくては容易に着られなかつたらしい。江戸時代には武家は之を侍從以上の着る禮服に用ゐ、下袴または出仕直垂といふた。◎かくてしも。かく遠島に遷幸遊ばす悲しい御出ましてあつても。◎東寺。京都市下京區九條町にある。◎おさへ。さゝへる意。車を駐める意。◎物見車。見物人の乘つてゐる車。◎よろしき女房。可なりな身分の女房。◎つぼさうぞく。ツボヤカナ裝束の義。垂髪を小袖に着込んで、小袖の前の兩方の褄を折り之を前に挿み、市女笠を戴き薄衣を被つた裝。◎獵師。◎竹の林。見物人の隙間なく立つてゐる樣を竹の叢生してゐるのに譬へたのである。◎目押し拭ひ鼻すゝりあへる。泣く有樣の形容。◎うき世のきはめ。現世の終局。◎さこそはありけめなれど。さぞマア悲しくあつたらうけれども。◎これを始めたる心ちぞする。此後醍醐帝の都出を、悲しい事の

醍醐帝も御車の御簾を少々捲き上げて、此方彼方を見渡しながら、御目にとまらない草木もあるまいと思はれる程丁寧に、あたりの景色を御覽になるやうである。岩木のやうな非情なものでないから、武士の鎧の袖どもも涙にシットリと濕つて見える。都の椙を、隱れて見えなくなるまで、御見送りなさるのも、矢張夢ではあるまいかとお思ひなさる。

【通釋】

鳥羽殿に御到着なされて、御服裝を改め、破子などをも差上げたけれど、一寸御箸を着けただ

初であるやうな心持がする。古往今來、悲しい話の數々は聞いてゐるが、然し此度程の悲しい事は今迄には無つたであらうと思ふ程にひどく悲しく思ふといふ意。◎何の御にほひにもふれず。何等袖の香にも觸れない。後醍醐帝の龍顏にも接しない意。◎このもかのも。此面彼面で、此方彼方の意。◎御目とまらぬ云云。これが御見納めであると思召すから、一本の木、一本の草でも、御目のとまるまいと思はれる程に丁寧に眼を注いで御覽になるやうであるといふ意。◎岩木ならねば。岩木のやうな非情のものでないから。伊勢物語、「いはき、人の心や岩木なるらん。」書言字考、「行路難云、心非二石木一豈無レ感。」◎しほどけ。涙にシットリと濡れる意。榮華物語、「御直衣の袖もしほどけにて。」

鳥羽殿におはしましつきて、御よそひあらため、破子などまゐらせけれど、氣色ばかりにてなかづ。これより御輿にたてまつれば、とまるべき御前どもの、空しき御車を泣く〳〵やりかへ

るとて、くれさどひたるけしきいと堪へがたげなり。かくて君は遙かに赴かせたまふ。淀のわたりにて、むかし八幡の行幸あ
りし時、橋わたしの使なりし佐々木佐渡の判官といふもの、今
は入道して、今日の御おくりつかまつれるに、その世の事おぼ
しいでられて、いと忍びがたさに給はせける。

しるべする道こそあらずなりぬとも、
淀のわたりはわすれしもせじ。

尊良
又の日は中務のみこ土佐の國へおはします。御供には爲明の中
將まゐる。日ごろかくあやしき御やどりにものし給ふを、辱く
思ひきこえつるに、遙かなる世界にさへいでおはしませば、さ
していかさまなるわざをして御覽ぜさせむと、あるじ時信けい
めいさわぐ。宮既にたゝせ給ふとて、瓶にさしたる花を折ら

せ給ひて、

花はなほとまるあるじにかたらへよ、
われこそ旅にたちわかるとも。

おなじ日、やがて妙法院の座主尊澄法親王も、讃岐の國へおはします。

◎御よそひあらため。旅の裝ひに改めるをいふ。◎氣色ばかりにて。一寸御簾を附けたゞけで。孫々召上らないでの意。源氏に、「朝臣のけしきばかりふれさせ給ひて。」とあるも、一寸シルシダケに簾を附けられた意。枕草紙に、「紙などにけしきばかり包みて。」とあるも、紙などにホンノ言ひ譯ホドに包んでの意。◎とまるべき御前どもの。都に留る筈の御前駈どもが。「御前ども」は普通御前駈の御隨身をいふのであるが、爰は供奉の公卿殿上人をさす。◎りかへる。都へ空車を送り歸る意。「やり」は「車を」に「かへる」は「御前ども」に關つてゐる。◎淀のわたり。淀川の渡。◎橋わたしの使。川に浮橋などを架ける時、其架橋の役を勤める行事をいふ。◎佐々木佐渡の判官。檢非違使尉佐々木高氏のこと。正中三年に出家して法名を道譽といふた。◎給はせける。高氏にお與へになつた歌といふ意。

感甚だ堪へ難いので、詠んで與へられた御歌。

しるべする道こそあらずなりぬとも、淀のわたりは忘れしもせじ。

翌日中務の御子尊良親王が土佐の國へ御出でになる。その御供には爲明中將が參る。日頃このやうな粗末な家にいらつしやるのを、畏れ多い事にお思ひ申上げたのに、遠い田舎にまで御出かけなさるかと、ましてどのやうな事をして御慰め申上げようかと、主人の時信が様々の用意をして畏く早やお出發なさるといふて、瓶にさしてある花をお折り遊ばして、次の歌

を讀まれた。
花はなほとまるあるじにかたらへよ、われこそ旅にたち別るとも。
同日、程なく妙法院の座主尊澄法親王も、讃岐へ御出でになる。

【通釋】
後醍醐帝は、今日津の國昆陽野の宿といふ所に御着きになつて、夕月夜の影かすかに面白い景色を眺めていらつしやる。かくて讀まれた御歌。
命あればこやの軒端の月も見つ、またいかならむゆくすゑの空。
昆陽野を御出發なされて、武庫川、神崎、難波、住吉などいふ所をお過ぎなさるとして、御心の中に御祈念なさる事があらう。廣田の宮の邊でも御興をとめて拜み申される。あしやの里、すゞめの森、布引の瀧などをお見渡なさるにつけても、昔 御幸どもをお思ひ出しなさる。生田の森をばお見過ぎなさらずに御過ぎなさつたやうである。美川の宿に御到着なされたに、丁度中務宮は

◎しるべ する。歌意、其方が今案内をする道は、以前の如き行幸の道ではなくなつて、遠島遷幸の道であると雖も、其昔石清水行幸の折、其方が行事となつて橋を渡した淀の渡は忘れもしまい、さぞ昔を思出して感慨の深い事であらう。◎爲明。爲世の孫、爲藤の子。◎あやしき御やどり。賤しい御宿。佐々木判官時信の家をさす。◎遙かなる世界。遠い國。土佐國をさす。◎いかさまなるわざをして云々。どのやうな事をして御覽に入れようかと、宮を御慰め申す事柄の趣向に工夫を凝らすこと。◎花を折らせ給ひて。花をお折りになつて、次の歌を讀ませられたといふ意。◎花はなほ。歌意、花は矢張此家に留つてゐる家の主人に對して、今迄自分と語らうて自分を慰めて呉れた如くに語らへよ、假令自分こそは旅に出發してお前と別れても。

先帝は今日津の國こやのゝ宿といふに着かせ給ひて、夕づく夜ほのかにをかしきをながめおはします。

いのちあればこやの軒端の月も見つ、
またいかならむゆくすゑの空。

こやより出てさせ給ひて、武庫川、神崎、難波、住吉などと過ぎさせ給ふとて、御心のうちにおぼすすぢあるべし。廣田の宮のわたりにても、御興とゞめて拜み奉らせ給ふ。あしやの里、すゞめの森、布引の瀧など御覽じやらるゝも、ふるき御幸どもおぼしいでらる。生田の森をばとはて過ぎさせ給ひぬめり。湊川の宿につかせ給へるに、中務の宮はこやのゝ宿におはしますほど、間近く聞き奉らせ給ふも、いみじうあはれにかなし。宮、

いとせめてうきうらうらん人やりの道ながら、

同じとまりと聞くぞうれしき。

福原の島より宮は御船にたてまつる。御門は、和田のみさき、勝(カツ)藻川(モガハ)をうちこして、須磨の關にかゝらせ給ふ。かの行平の中納言「關ふきこゆる。」といひけむは、浦より浦なるべし。あは

れに御覧じわたさる。源氏の大將の、「なくねにまがふ。」との給ひけむうらなみ、今もげに御袖にかゝる心ちするも、さま〴〵御涙のもよほしなり。播磨の國へつかせ給ひて、しほやたるみといふ所をかしきを問はせ給へば、さなむと奏するに、「名を聞くよりからき道にこそ。」との給はせて、さしのぞかせ給へる御ありがたくなまめかし。けちかきかぎりは、あはれにめでたうもと思ひ聞ゆべし。大くら谷といふ所少し過ぐるほどにぞ、人麻呂の塚はありける。明石の浦をすぎさせ給ふに、島がくれゆく船どもも、ほのかに見えてあはれなり。

水の泡のきえてうき世をわたる身に、
うらやましきはあまの釣船。

◎津の國こやのゝ宿。摂津國河邊郡にある。今は稻野村と改めた。後拾遺集、長

昆陽野の宿に御滯在遊ばす折で、間近く浜川の宿に主上が御座あるとお聞き申されるのも、ひどう身に沁みて悲しい。この時宮の讀まれた歌。

いとせめてうき人やりの道ながら、同じとまりと聞くぞ嬉しき。

福原の島から宮は御船に御乘りになる。

後醍醐帝は、和田の岬や芥溪川をうち越して、須磨の關にさしかゝりなさる。かの行平の中納言が「關ふきこゆる。」と讀まれたであらう所は、この浦よりも遠い彼方であらう。身に沁み〴〵と御覽じわたされる。源氏の大將が「なくねにまがふ。」と讀まれたであらう浦波が、只今も實に御袖にかかる心持のするのも、色色樣々御涙を誘ふ種である。播磨の關へ着かせられて、關屋垂水といふ所の面白い趣あるを、何といふ所かと、お尋ねなさると、關屋垂水であると申上げますに、「土地の名を聞くからしてつらい感じのする辛い道中である。」と仰しやって、さし覗きなさる御樣子は、氣高くして優美である。御輿の近くに候ふ限りの武士は、主上の御樣子を見奉つて、實に結構でいらしやるよと、思ひ申

算附都、「かもめこそよがれにけらしゐな野なる、こやの池水うは澄りせり。」◎夕づく夜。夕月のある夜。宵の間宵時月ある頃。源氏物語、「夕月夜のをかしき程に出だし立てさせ給ひて。」◎いのちあれば。歌意、命生きて居たからして、昆陽野の宿に旅寢をして、宿の軒端に懸つてゐる月をも眺めた、此先きの事はまだどうあるであらうか。「ゆくすゑの空」は、月の縁語に空と言うたいけで、單に將來の事といふ意。◎武庫川。摂津國有馬郡中の諸山に源を發し、生瀨に至り武庫郡に入り、南流して海に至る。その河口を鳴尾崎といふ。◎神崎。摂津國河邊郡小田村に屬し、三國川（一名神崎川）に臨んでゐる。往時、京津間の水驛であつた。◎難波。廣くは摂津國、狹くは摂津國西成郡なる 淀川流域の地をいふ。神武天皇東征の折、此地に來た所が、浪が速かつたのでナニハと言うたのであるなどいふ說もあるが、附會の說である。◎住吉。摂津國東成郡住吉村。卽ち住吉神社のある宮ともいふ。◎あしやの里。和名抄に、「摂津國菟原郡葦屋（アシヤ）（原は屋の誤なり）」とある 伊勢物語、「昔男津の國菟原郡葦屋の里にしるよししして云々。」新古今集、「いさり火の昔の光ほの見えて、葦屋の里に飛ぶ螢かな。」アシヤともアシノヤとも言うたのである。◎すゝめの森。摂津國住吉川の川口なる魚崎から深江邊の濱松原

須磨村の海濱を須磨の浦といふ。此地は王朝時代に於ける貴顯紳士の流行地で、須磨に至つて浦に注ぐ、長さ四十町許りの細流である。◎須磨の關。攝津國武庫郡須磨の浦と言ひけむ」◎生田の森。攝津國、矢田部郡生田宮村、今の神戸市にある生田神社のこと。◎淡川の宿。兵庫の北口にある。◎間近く聞き奉らせ給ふも。後醍醐帝は見蕨野からは間近い淡川の宿に滯在せられるといふ事をお聞き申される。◎いとせめて。歌意、自分の心から進んで行くのではなく、人のやらするのも。◎面白くもない道中ではあるけれども、自分が父の天皇と同じ宿に泊つたと聞くのが、つらい中にもせめても慰しい。「せめて」はセヤリテの約言のミをメに轉じたので、ネシつめての意。攻め苛せて。强ひて。古今集、小町「いとせめて戀しき時はぬば玉の夜の衣をかへしてぞきる。」「人やり」は自分の心からするのでない人がする意。新拾遺「人やりにあらぬものから恨むるは、身の理も思ひ知らずや。」◎關原の島。不破關が都を遠くした處。今の神戸の須磨のことか。◎和田のみさき。和田の泊の事。◎苅藻川。攝津國長田山麓から出て湊山を繞り、南流して尻池に至つて海に注ぐ、長さ四十町許りの細流である。◎須磨の關。攝津國武庫郡

ある。かくて御覽みになつた始。

水の上をわたる身に、てらてらきやまをわたる身に、てらてらきはあまのつりりあもが彼かに見えてゆく船どもが、海處に點れゆく船どもが、明に、人數の數はあつた。石の浦を御通りなさる處に、いふ所を少し過ぎる處ですもあらう。大くら谷といふ、それであらう。參考本須磨記「千代に變らぬ事は、松原みかげの松、雲井にさらす布引は、我朝第一の瀧とかや。云々」◎布引の瀧、攝津國武庫郡雲内村の西に在る。同花集「雲井より貫きかくる白玉を、誰れ布引の瀧と言ひけむ」◎生田の森。攝津國、矢田部郡生田宮村、今の神戸市にある生田神社のこと。◎淡川の宿。兵庫の北口にある。◎間近く聞き奉らせ給ふも。後醍醐帝は見蕨野からは間近い淡川の宿に滯在せられるといふ事をお聞き申される。◎いとせめて。歌意、自分の心から進んで行くのではなく、人のやらするのも。◎面白くもない道中ではあるけれども、自分が父の天皇と同じ宿に泊つたと聞くのが、つらい中にもせめても慰しい。「せめて」はセヤリテの約言のミをメに轉じたので、ネシつめての意。攻め苛せて。强ひて。古今集、小町「いとせめて戀しき時はぬば玉の夜の衣をかへしてぞきる。」「人やり」は自分の心からするのでない人がする意。新拾遺「人やりにあらぬものから恨むるは、身の理も思ひ知らずや。」◎關原の島。不破關が都を遠くした處。今の神戸の須磨のことか。◎和田のみさき。和田の泊の事。◎苅藻川。攝津國長田山麓から出て湊山を繞り、南流して尻池に至つて海に注ぐ、長さ四十町許りの細流である。◎須磨の關。攝津國武庫郡須磨

思はれてあくなら起きるつゝ春を忍びやかにかみわたす。」などと見えてゐる。◎調はれて……「調はれて」は「調はれたら」の略。◎須磨……摂津の国の歌枕。◎なくねにまがふ……「須磨」の註の所に源氏の大将。源氏物語の主人公光源氏。◎なくねにまがふ。「須磨」の註の所に挙げてある。「濡ひわびて泣く音にまがふ浦波は、思ふ方より風や吹くらむ。」の歌をさす。歌意は、都の恋しさにつらく思らて泣く、その自分の泣く音に紛んで絶えず聞える浦波の音は、多分自分の恋しく思らてゐる都の方から風が吹いて来はしまいか。◎しはやたるゝ。新撰風明石郡にある、重座と垂水とを立てるのであらう。◎同はせ給へば。後醍醐帝が作臣に、「此歌は何歌ぞ。」とおたづねになつたから。◎さなむある。「さなむ」という意、新撰風土記に、重座垂水でありますよ。「さなむある。」ということの意。◎名を聞くよりからき道にこそ。土地の名前を聞くからして、辛いという意味のある重座などいふ所で、土地の名前通りにつらい道中である。「からき」に「辛い意とつらい意とを合めてある。◎きしのそかや給ふ。歌の意をかやと給ふ。年古りがたく老ゝしての意。源氏物上げて外を眺め見るの意。◎ふりがたき。年古りがたく老ゝしての意。源氏物語に、「いでや御すき心のふりがたきぞ」などあるも同意。◎甘美かゞやかは、

御輿の近くに供奉する四方の警固の武士は、◎あはれにめでたうもと。各の御感嘆がしみ〴〵お察でマアある事よと。「あはれにめでたうもあはすかなと」の意。◎大くら谷。今の明石郡のこと。◎人麿日の影、柿本人麿の霊。◎鳥がくれゆく迄。古今集雑歌上に、「ほの〴〵と明石の浦の朝霧に、島がくれゆく舟をしぞ思ふ。」とある歌の句を取つたのである。この歌は古今集の真蹟に「柿本人麿の歌なり。」とあるが、今昔物語には小野篁の歌として載せてあるものである。◎水の泡の。歌意、水の泡の始んだと思へば直に一方から消え失せるが如き果敢ない此世を、儚しい思に沈みつゝ過す我身にとつては、美しい迄に消ゆる意と思ひ消える意とを兼ね、「うき」に「憂き」と「浮き」との両意を兼ねて、水の泡、消え、うき、は共に歌語に用ゐてある。源氏の幻の巻に引んで何の物思ひもないやうなさまを歌んだのである。

野中の清水、ふたみの浦、高砂の松など、名ある所々御覧じわたさるるも、かゝる御幸ならばをかしうもありぬべけれど、よろづかゞやくらむ御みだり心ちに、御目とまらぬも、我れながらいたう耐じにけるかなとおぼさる。いと高き山の崖に、花も

【通釈】
野中の清水、ふたみの浦、高砂の松などいふ所々を御覧じわたされるにつけても、通常〳〵見されるに引換へ、面白く御幸でないならば、面白く

もし乙く咲きつゞきて、白雲を分けゆく心ちするも艶なるに、都の事かずかずおぼしいでらる。

花はなほうき世もわかずさきてけり、
みやこも今や盛りなるらむ。

あと見ゆる道のしるべのさくら花、
この山人のなさけをぞしる。

十二日に、加古川の宿といふ所におはします程に、妙法院の宮讃岐へわたらせ給ふとて、おなじ道少しちがひたれど、この川の東野口といふ所まで、參り給へるよし奏させ給へば、いとあはれに相見まほしうおぼされど、御送りのつはものどもゆるし聞えねば、宮じなしく通り給ふ。御心のうち、堪へがたく亂れまさるべし。さらなる事なれどつかばかりの事だに御心にとまらないのも、自分自身も、風雅であるにつけて、分けてゆく心持のするのを、都の事をアレヤコレヤと色々お思ひ出しなさる。と思ひたまつづいて、白雲の間々を咲き出した事であるわいと、おながら、ひどう心弱くなにに、あらゆる事物の御目に、なるやうな亂れ心地の爲く此時は悲しさに心もくれるであらけれど、

花はなほうき世もわかずさきてけり、都も今やさかりなるらむ。

のあと見ゆる道のしるべのさくら花、この山人のなさけをぞしる。

十二日に、加古川の宿といふ所に御泊り遊ばされて、同じ流れゆく道筋ながら、少しは違つてゐるけれど、加古川の東岸なる野口といふ所まで參りなさるといふ事を、申上げさせられたく思ひなさるけれども、主上は御對面御許し申上げないから、宮は空しく此地を御經過なさる。御心中は堪へがたく亂れまさるであらう。今迄いふまでもない事ではあるけれど、これは御心遣りに

まかせずなりゆく世の中、いくばくにつらくつらからじからぬ人なし。

◎野中の清水。古今集に、「古の野中の清水ぬるけれど、もとの心を知る人ぞくむ」とあるを本に、野中の清水を讀んだ歌が、其後の歌集に諸山ある。そして顯注密勘に、野中の清水は播磨國印南野にあるとしてある所から、此書の作者が今後醍醐帝の道すがらの名所を列ねる序に、わけもなく野中の清水などと書いたのであらう。能因の歌枕には、「野中の清水とは本歌の事である」と云つてあり、契沖は布留野にあるといひ、顯昭は、たゞ野の中にある流水の處だといつてゐるので、歌名所としての野中の清水は據所が疑はしい。◎ふたみの浦　夫木集に、「美作國へ下りけるに、播磨の國二見の浦にて、時鳥を聞きて、衆歸中納言、『たまくしげ二見の浦の時鳥、あけ方にこそ鳴きわたりけれ。』とある。今の明石浦の西の濱邊をいふ。◎高砂の松。古今集序に、「高砂住の江の松も相おひのやうに」とあり、同書雜歌に、「誰をかも知る人にせむ高砂の、松も昔の友ならなくに。」「かくしつゝ世をやつくさむ高砂の、尾上に立てる松ならなくに。」などあるを始めとして、歌名所の一つである。◎かきくらす御みだり心ち。悲しみに心が閉ぢる亂れ心地。◎花はなほ。歌意、花は矢張、憂き世であるといふことをも、思ひ別

けずに咲いたわい、多分此様子では、都も今が花の盛りであるであらう。◎あと見ゆる。歌意、ところ〴〵に花を散らした跡が見える、これは多分山人が、わが道中の目じるしにと思つてしておいたものであらう、さればこの櫻花を見るにつけて、この山人の情の濃かなのを知る事である。「しをり」は、山人などが山へ行く時帰路の紛れぬ爲に所々に木の枝などを折りかけておくのをいふので、轉じて道のしるべの意に用ゐる。この歌は櫻の花の處々散りしいてゐるのを見て、山人の心あつてしたやうに見立てゝ詠ぜられたものであらう。◎加古川の前。播磨國加古郡にある。◎この川の東野口。加古川の東岸なる野口。◎おなじ道少しちがひたれど。同じく流されて行く道筋が主上とは少し異なつてゐるけれど。太平記に、妙法院の流され行く道を、「備前國までは陸地を經て、兒島の吹上より舟に召して讃岐の詫間につかせ給ふ。」とある。して見ると播磨の邊は宮も帝の過ぎさせられた跡を通つたのである。◎宮むなしく通り給ふ。妙法院の宮は父の帝に對面せずに空しく此地を經過せられる。◎いへばえに。いへばえいはぬにの略。口に出して言へば言ひ得ないので、言はずにゐる程に。伊勢物語、「言へばえに言はねば胸に騒がれて、心一つに歎く頃かな。」

十七日、美作の國におはしましつき給。御心ちなやましくて、この國に二三日やすらはせ給ふほど、かりそめの御やどりなれば、物深からで、候ふかぎりのものゝふども、おのづからけぢかく見奉るを、あはれにめでたしと思ひ聞ゆ。君もおぼし續くる事ありて、

あはれとはなれも見るらむ我が民を、
　思ふこゝろはいまもかはらず。

おはしますに續きたる軒のつまより、煙の立ちくれば、「いほりにたける。」とうち誦ぜさせ給へるもえんなり。

よそにのみ思ひぞやりしおもひきや、
　民のかまどをかくて見むとは。

廿一日、雲清寺といふところにて、いとおもしろき花を折りて、忠顯の少將そうしけり。

【通釋】

ならなくなつた世の中は、口に出していへばとて言ひ得ない程に、つらく悲めしい事に思はぬ人はない。

十七日に美作國に御到着なされた。御氣分が惡くて、此國に二三日御逗留なさる間、假の行在所であるから、宿の様子も奥深くなくて、伺候するあるたけの武士どもは、自然主上を御近く拜し奉るので、身に沁みて結構な御幸姿であらせられるとお思ひ申上げる。主上もお思ひつゞける事があつて、次の歌を讀まれた。

あはれとはなれも見るらむわが民を、おもふ心は今もかはらず。

御座所につゞいてる軒の端から、煙が立ち上つて来るから、「いほりにたける。」とお歌ひなされたの

も風雅である。かくて讀まれた御歌。

よそにのみ思ひぞやりし思ひきや、民の竈をかくて見むとは。

廿一日に雲濟寺といふ所で、大層おもしろい櫻の花を折つて、忠顯の少將が次の歌を申上げた。

かはらぬを形見となして咲く花の、都はなほもしのばれぞする。

後醍醐帝の御返歌。

色も香も變らぬしもぞうかりける、外の花のこずゑは。

また小山の五郎とかいふ武士に、おなじ花をやるとて、少將、

御かへし

色も香も變らぬしもぞうかりける、みやこの外の花のこずゑは。

又小山の五郎とかやいふ武士に、おなじ花をやるとて、少將、

うきたびとおもひははてじ一枝の、

花のなさけのかゝるをりには。

かくてなほおはしませば、來し方はそこはかとなくかすみわたりて、あはれに遠くもきにけるかなと、日數にそへて、都のいとゞ隔たりはつるも、心ぼそうおぼさる。ほのかに咲きそむと見えし花の梢さへ、日數も山も重なるにそへて、うつろひまさりつゝ、上り下るつゞらをりにいと白く散りつもりて、ひらぎえたる雪の心ちす。

花の春また見むことのかたきかな。

おなじ道をばゆきかへるとも。

いとかたしとおぼすものから、猶さりともたひらかにだにあらばと、おのづから御本意遂ぐるやうもありなむなど、御心もて慰めおぼすもはかなし。

◎慨歎からで。御宿所の有樣も聖澤のなでてもいふ意。◎あはれとは。歌意、新の如き粗末な假の宿に起臥する自分の身の上を、身に沁みて悲しい事と、お詞も見るであらう、何となれば自分が臣民を愛する心は、在位の時も今日も變らない事であるから。一本に、下句を「我が民と思ふ心はいつもかはらず。」とある。「我が民と」は自分の人民として汝等を愛する心はの意。◎いほりにたける。源氏物語、須磨の巻に「山がつの庵にたけるしばゝも、こと同ひ來なむ慰ふる人も。」とある歌である。此歌の意は、數多たび訪ねて來て欲しい、わが悲しく思ふ

里の人。「こば」に栄の意と、栄えの意とを重ねた「山ぶこの里」、「山ぶこの里にたかる」は、「こばへ」と言ふ為の序。◎うつうつ語ぎも絶えつゝ。語ぎは繰り返して言ふ。◎軒端つゝきに間近く栄の花を見ようと思つた事であらうが、思はなかつた事である。◎豪族等。所在不詳。◎おはらは。豪族、色も香も栄の花に愛らないのを思出の種として栄く花を見るにつけ、花の名は一層懐しく思出される。「おたま」は後の思出の料となるもの。こゝでは名を思出す縁の記念。「栄く花の名」は、栄く花の、名、と「花」という語が上下両方に用ゐられてゐる。◎色も香も。豪族、色も香も名の花と愛らないのが、名を思出す媒介となつて栄くわけ、給田林の土地に栄く橘花の縁は。◎小山の五郎家臣。小山の五郎家臣。◎うまえびと。豪族、就国地尾つらい旅であると思つては参ふまい、一夜の花の縁が自分達に及ぼす幸は。即ち、お前から幸の旅でもあけられる時には、つらい旅だと、いうに思つては参ふまい、つらいながらも多少はそれが慰められることがあるとの意。◎そこはかとなく。そこはかりこういう事なく。ここそこというこことなく。一面に。◎うつうつまぎりつつ。花の色が栄くおうになつて。「うつうつ」は、うつうつの意に栄く行く意にも就けられ、善用は、花の色の栄く行く意に就けられてゐる。

第十九　久米のさら山

【通釈】
久米のさら山という所を
お越えになるというて、
詠まれた御歌。
　きゝおきし久米のさら
　山越え行かむ、道とは
　かねて思ひやはせし。
逢坂という土地は、東国
へ下る方もあらうなどと思ひなさるる。

久米のさら山という所、越えさせ給えとて、

きゝおきし久米のさら山越えゆかむ、
道とはかねて思ひやはせし。

逢坂というは、東路なりともありけりと、なごしめして、

立ちかくりこえゆく關ともはばや、

みやこにきゝしあふ坂の山。

みか月の中山にて、昔後鳥羽院の仰せられけむこと、思しいづるさへ、げにうかりける、ためしなり。

傳へきくむかしがたりぞうかりける、
その名ふりぬるみか月の森。

そのなかばになりぬれば、御送りのものども上下、都いでしよりも、猶花やかに、今めかしうさうぞきかへたり。大方はあやしうさまことなる御幸なれど、道すがらの御まうけ、國々に心づかひしたる氣色などは、からさまの御ありきとは見えず、いとやむごとなく、世をもいみじう治めさせ給へりける名殘にやあらむ。いとねんごろにのみつかまつれり。いにしへの御幸どもには、かうはあらざりけりとぞ、ふるき事知れる人々いひ侍りける。四月一日の頃、百敷の宮の中おぼしいでられて、

さもこそは月日も知らね我れならめ、
ころもがへせし今日にやはあらぬ。

出雲の國八杉の津といふ所より。御船にたてまつる。大船二十四艘、小舟どもは數も知らずつゞきたり。遙かにおしいだすほど、今一かすみ心ぼそうあはれにて、誠に「二千里」の外の心ちするも、今さらめきたり。かの島におはしましつきぬ。

てなくてもあるわいと、お聞きになつて、讀まれた御歌。

立ちかへりこえゆく關と思はばや、都にきゝしあふ坂の山。

みか月の中山で、昔後鳥羽院の仰しやつたであらう事を、お思ひ出しになるのさへ、いかにもつらくあつた先例である。かくて讀まれた御歌。

つたへきく昔がたりぞうかりける、その名ふりぬるみか月の森。

都から隱岐への道中も、半ばになつたから、御警固の武士どもは、上下みな、都を出た時よりも一層花やかに當世風に裝束し更へた。大體は變な異樣の御幸であるけれど、道々の御休息所や御宿舍の設備をば、國々で注意してゐる樣子などは、かくの如き御幸とは見えないで、大層丁寧である。

遠島へ御遷幸遊ばすとは言ふけれども、今まで一國の元首で、天下をもひどう立派にお治めになつて居られた名殘であらうか。非常に懇にのみ用意してお仕へ申した。昔の後鳥羽院などの遠島へ御遷幸なされた時などには、このやうに、設備が整うては居らなかつたと、昔の事を知つてゐる人々が言ひました。四月一日

⊙久米のさら山。美作國久米郡のさら山である。久米郡にある所から、久米の佐良山といふたので、古今集、「美作やくめのさら山さら〳〵に、我名はたてじ萬代までに。」後鳥羽院御集、「音に聞く久米の佐良山さら〳〵に、已が名立てゝ降る雪かな。」など、歌などに澤山詠み込まれてある名高い所。⊙きゝおきし。歌意、かねて人の物語に聞いておいた久米の佐良山は、われ自ら越えて行かう道であるとは

頃、百敷の宮の中の事どもをばお思ひ出しなされて、讀まれた御歌。

さもこそは月日も知らぬわれならめ、衣がへせし今日にやはあらぬ。

出雲の國八杉の津といふ所から御船にお乘りになる。大船が二十四艘に、小舟どもは無數に多く漕ぎ出す。遙に舟を漕ぎ出す頃は、今一重おぎ來し方も戀を隔てて、心細く物悲しくて、いかにも二千里の外に來たやうな心持のするのも、今更らしい事のやうである。かくて、かの隱岐の島に御到着遊ばした。

かねて思うたか、思はなかつた。◎遙坂。美作國眞島郡にある。◎東路ならでも。東國へ通ふ路でなくても。◎きこしめして。お聞きになつて。◎立ちかへり。歌意、再び都に立ちかへり越えて行く關であると思ひたい、都で聞いた同じ名の逢坂の山。旅路に在つてかねて名をきいてゐる逢坂山を越えるといへば、都に還る時より外にはないので、これがかの東路の逢坂山で、都に立ちかへり越えて行く關でありたいと願ふ意を歌つたのである。◎みか月の中山。美作國と伯耆國との堺にある山。◎後鳥羽院云々。後鳥羽院が隱岐國へ流されて行かれる途中、美作と伯耆との境にある中山をお越しになる時、向ふの組に細い道がありますので、「あれはどこへ通ふ道か。」と御尋ねになつた。傍の者が「あれは都へ通ふ舊道であります。」とお答へすると、院は、「都人讓れふみそめて通ひけむ、向ひの路のなつかしきかな。」と讀まれたといふ話が、承久軍物語にある。この時の事を指していうたのであらう。◎傳へきく。歌意、傳へ聞く後鳥羽院の感慨を述べられた昔物語がつらく思はれるわい、其名我が耳に舊くなつてゐる三日月の森よ。◎さうぞきかへたり。衣服を變更へた。◎あやしうさまことなる御事。遠島へ遷幸遊ばすのであるから、行裝も組末に普通とは樣子の異なつた御幸であるといふ意。◎道すがらの御まうけ。道々の御休息所や御宿舎の御設備をいふ。◎か

も千歳の松の如くには長命しない晋時の世に、却つて氣苦勞が多いであらう。到底遁れる事の出來ない死の道は、今死ぬのも後に死ぬのも何れにしろ同じ事で、死に臨んで心の亂れのないやうにしてでも居るならば、自然蓮華淨土に赴くであらう。」と、思ふ心はしんとして、一方には、都の方も戀しく、身に沁み〴〵と感じて、悟つてはゐるものの、心の惑ひ亂れる事が多くあつた。何かにつけて事の樣子を見るに、自身の行末も遠くはないであらうと合點した。頃りの入道が微かに知らせ言

に待りけれ。「けれ」は「けり」とあるべきである。上に係りのないに「けれ」と結ぶは破格。◎まぼなられど。重罪に處すべき旨を、それと正面から打明けて語るのではないが。◎心えはてられぬ。重罪に處せられるといふ事が合點して終はれた。◎かたじけなういみじうも待りしかな。此句の上に、「たゞ御道中の儀の間お仕へ申したのですら」といふ句を置いて考へる。勿體なく大層哀れでございましたよ。◎さながらなむ推し量り聞えさせ待りし。御近臣たちが後醍醐天皇の御事をいかに悲んだであらうか、其の御心中などは、ソックリ其の儘に御推量申し上げました。◎何事も昔に云々。後醍醐帝は御事も昔の聖明な天皇に劣らずに立ち並んで、結構であらせられた御方で。◎世下り時衰へぬる末には。神德の明かであつた世も下つて、神威も誠に盛んな時運も衰へて、道德倫理の衰微した末世に於ては。◎餘りたる御有樣にや云々。時世には過ぎた勝れた御器量であらせられたが爲に、このやうに北條氏退治の企も起され、遠島遷流の御身となつたのであらうかとまでも。◎せめては思ひ給へよらるゝ。何故にかく成られたかと考へ考へての末、其理由の見出しがたいあまり、おしつめては考へつかれますよ。「給へ」は貴人に對する場合に自分の事の上につけていふ卑下の語で、「見」「聞」「思」といふ語の下に添へるのが例である。「よらるゝ」の「るゝ」は、動作の自然に起

欠

つて添められた名の動詞である。且「こそ」は連體形であるから、文に「春と」といふ句も省略してあるものと見る。◎大方の世につけても。一般の世の中の事についても。◎のどやかにいひまうけはひ。「又一つには」といふやうな句をおいて下文へつづける。佐々木入道のあまりに殺和な話しぶりが具行の「うかならむ」と聞つぶれる一つの種になるのである。◎おのが程には云々。具行の囚はれの身分には過ぎてゐる美酒など。◎所につけて事そぎあらゝしけれど、此句は酒を形容してゐる。柏原といふ荒涼な場所に處して簡略に粗末であるけれども。此句の上に「勿論」といふ語を置いて解くとよく文意がわかる。◎さる方にしなして。然るべきむきに作り拵へて。此句の下に「精進し」といふ句を置いて解く。◎武更にいひ出づることもなし。おそど、歳月の事を言ひ出すことさへなく。◎いかならむと。具行卿の心の有様をいふ。如何なるであらうかと。◎聞うつぶれて悲ゆるも。悲嘆がつて心配するのも。◎かつはいとわしかし。重く重荷をしてゐながら、一方には甚だ業が薄くあるわい。◎いづくの島守となれらんも云云。死刑を免れて、何處かの島に流され、其處の島守となつて居らうのもつまらない。「なれらん」は「なる」の現在完了の未然形「なれら」に未來の「む」の加つたもの。◎千年の松ならぬ身、千歳の齢を保つ松の如くに長命して居らぬ吾等の世。此句の次に「遠い島などに流されて憂き年月を送るのは」といふ句を置いて解く。◎心づくし。氣苦勞。◎遥るまじき道、誰にも遅れる事の出來ない道、即ち死のこと。◎涼しき方にも赴きなむ。一切の情愛の念を斷滅した清涼三昧の境に赴くであらう。「涼しき方」とは、清淨の境、こゝでは西方淨土をいふ。◎さすがなる事。悟つてはゐるものゝ、心の惑ひ亂れる事。◎事の氣色。佐々木入道などの樣子。◎行末遠くはあるまじかめり。具行卿自身の將來が遠くはあるまいやうである。近い中に殺されるやうだといふ意。◎頂りが云々。具行卿を預つてゐる佐々木入道が、重い罪に處せられる途をヮカに知らせたのも、なさけがあつて新く具行卿に合點せしめるのであるから。◎同じうはと思ひて。同じ殺されることには出家してから殺されようと考へて。◎なんでふことかは。何といふ事があらうか、何といふ事もあるまい。◎みな月。六月のこと。「みな月」の語源については、六月は農事も苗盡きたから、ミナシ月といふのを誤つてミナ月といふとか、又は此月は熱くて水泉が涸れ盡きる義から、水無月といふのであるとか、又は此月は雷鳴があるので加美奈利月といふべきのを「カミナリ」の上下を省いたのだなど色々に附會するが、どれも詳かでない。◎かの事。あの殺されること。◎たゞしなほりけるむくいの程。公卿殿上人の貴い身分の者が遠島の如き田舎に流されて、其處で死ぬ事は今言ふ「罪なほりけるむくいの程」である。◎さるべき事ども。前世の因緣で今生に受けねばならぬ事柄。◎かつたらうか。まもなく心持は、どんなに悲しく思ひますけれど、別段何と思ひ開えがどうだらうかといふ事もあるまい。」と答へて許した。ここのやうに、同じく殺される事には出家してから後にと考へて、「罪業しとうと思ふ。」と言ふと、入道は「甚だ氣の毒な事である。鎌倉へ報知先例のなかつた前世の應に淺ましく思はうぞ。」どうしてこの程合を、どうしても、なほ心中は悲しくあつたらうけれど、ひどう人目のわるい態度ともなく、覺悟すべき事どもを思つてゐる樣子に見えた。此報知をば奥方なども、常内侍の待ち受けて聞くや、

消えかゝる露の命のまの末ぞゆかしき。

此歌によつても見ても、中納言はまだ鎌倉を滅さう

まれた歌。

ばかりは、虎の口を遁れたる御さまにて、こゝかしこにさすらへおはしますも、やすき空なく、いかで過しはつべき御身ならむと、心苦しくみえたり。

◎母おもと。「おもと」は、人を親んで呼ぶ詞で、多く女の上に用ゐる。◎老いの末に。年老いた後に。◎身にかへても。我身に代へて、自分が罪を負うても。◎しづみつるを。都離れて埋れてゐたのを。◎このほどのついで。今度の亂で多くの人々を罪する序。◎既にきられけるときの頌。此句の上に、「汝の句は」といふ句を置いて解く。「頌」とは、三言乃至八言を問ふことなく、必ず四句から出來てゐて、美辭を聯ねて歌頌するもの。梵語偈陀の譯。◎四大本無レ主。此頌は譯林類集に、擊法師遭二秦王一將レ就レ刑說レ偈云、四大元無レ主、五陰本來空、將レ頭臨二白刃一、猶似レ斬二春風一」とある偈文をとつたのである。「四大」は地水火風の所造であり、地水火風の和合して出來たものである、依て之を稱して大といふのである。又、四大を二種に別け、正報の人身を內の四大ともいひ、依報の諸色を外の四大ともいふ。四大本無主とは人身を造つてゐる四大は本來

の許に、哀れ深い手紙を書いて、それを屆けて呉れるやうにというて武士に預けた。次のは最早斬首せられようとした時に臨んでの、中納言の誦せられた頌であると聞きました。

四大本無レ主。五蘊本來空。將レ頭傾二白刃一。但如レ讃二夏風一。

大層氣の毒でありました。俊基も同樣に斬られたといふ事である。このやうにのみ、皆樣々に、或は死罪に、或は遠流に處せられる事を、各思ひ歎くけれど、其有樣は筆にも書き盡し難い。大塔の尊雲法親王だけは、危險な場所を遁れた御有樣で、此處彼處に流浪していらつしやるのも、心の安まる所がなく、どうして北條氏の手にかゝらずに月日を過し遂げる事の出來る御身であらうかと、お氣の毒に見えた。

【通釋】

隱岐の小島では、月日を經過すると共に、甚だ堪持ち主のないものであるといふ意。◎五蘊本來空。五蘊とは、一に色蘊（眼、耳、鼻、舌、身、色塵香味觸等、五根五境の有形の物質をいふ）二に受蘊（境に對して事物を受入れる心の作用）三に想蘊（境に對して事物を想像する心の作用）四に行蘊（境に對して事物を了別識知する心の本體）をいふので、色蘊は身、受想行識の四蘊は心である。依て五蘊本來空とは人の身心は本來空なものであるといふ意。五蘊は五陰とも云ふ。◎將レ頭傾二白刃一。但如レ讃二夏風一。頭を以て之を白刃に傾けても、たゞ夏風を饋るが如くに、何等障碍となるものがなく念頭にかゝる處がない。太平記には、「五蘊假成レ形、四大今歸レ空、將レ頭當二白刃一、猶聽一陣風一。」とある。◎同じやうにぞ。丞朝と同樣に殺されたのであると。◎虎の口を遁れたる御さま。極めて危險な場所を遁れた御有樣。「虎口」は危險な場所を喩へた語。◎やすき空なく。安い心がない。◎いかで過しはつべき御身ならむと。どうして、賊の手に捕はれずに月日を過し遂げる事の出來る御身であらうか、甚だ不安なものであると思はれて。

隱岐の小島には、月日ふるまゝに、いと忍びがたう思さるゝ事のみぞ、かずそひける。いかばかりの怠りにて、かゝるうきめ

にたれど、なほめかしうをかしき御さまにて、
きこえ給ふ。

さしてやむごとなきあたりとにはあらねど、みづからしたしき人にて、
とも呼ばる。

⊙いかばかりの心ざしにか。
⊙前の世のみ。
⊙いかでその罪を見るらむと、
⊙前の世のみつからく思ひ知らるゝにも、
いかで

事、夢にも現にも多くなむありける。つれ〳〵におぼさるゝ御
りをとり行はせ給ふ。法のしるしをも試みがてら、うちたえ御精進にて、朝夕つ
とめ行はせ給ふ。
⊙前の世のみつからく思ひ知らるゝにも、いかで
その罪をも報いてむとおぼして、うちたえ御精進にて、朝夕つ
とめ行はせ給ふ。法のしるしをも試みがてら、うちたえ御精進にて、且はおぼす
らむ、且は
⊙前の世のみつからく思ひ知らるゝにも、いかで
その罪をも報いてむとおぼして、うちたえ御精進にて、朝夕つ
とめ行はせ給ふ。法のしるしをも試みがてら、うちたえ御精進にて、且はおぼす
らむ、且は

心ざしてやむごとなきあたりとにはあらねど、みづからしたしき人にて、
とも呼ばる。

さしてやむごとなきあたりとにはあらねど、みづからしたしき人にて、
にたれど、なほめかしうをかしき御さまにて、
きこえ給ふ。

事、夢にも現にも多くなむありける。つれ〳〵におぼさるゝ御
りをとり行はせ給ふ。廊めく所に立ち出でさせ給ひて、遥に浦のかたを御
覧じやるに、あの釣船ほのかに見えて、秋の木の葉の浮べる
心ちするも、あはれに」いづくをさして」かとおぼさる。

うきてたゞよふあまの釣船。

「浦こぐ船のかぢをたえ」とうち誦じて、御涙のこぼるゝを、何と
なくいよ〳〵心ぶかげなり。ねび給ひ

心ざしてやむごとなきあたりとにはあらねど、みづからしたしき人にて、
とも呼ばる。

さしてやむごとなきあたりとにはあらねど、みづからしたしき人にて、
にたれど、なほめかしうをかしき御さまにて、
きこえ給ふ。

事、夢にも現にも多くなむありける。つれ〳〵におぼさるゝ御
りをとり行はせ給ふ。廊めく所に立ち出でさせ給ひて、遥に浦のかたを御
覧じやるに、あの釣船ほのかに見えて、秋の木の葉の浮べる
心ちするも、あはれに」いづくをさして」かとおぼさる。

うきてたゞよふあまの釣船。

「浦こぐ船のかぢをたえ」とうち誦じて、御涙のこぼるゝを、何と
なくいよ〳〵心ぶかげなり。ねび給ひ

ら、このやうな邊鄙な土地につけては、まして貴い惜しい御身であることは、御自身でもひどう勿體ない事に思召される。

【通釋】都では十月になつて、御禊大嘗會などの支度に、世間が物騒がしく、內藏寮、內匠寮、うち殿、染殿何やかや、その道々に應じて、八釜敷く騒ぎ合うてゐるのも、一方の後

何を補ふ。◎心ざす。歌意、漕いで行かうと志してゐる方面を考へたいものだ、浪の上に浮いて漂うてゐるあまの釣船よ。◎浦こぐ船のかぢをたえ。此句は、續古今集、小野小町の歌「須磨のあまの浦漕ぐ船のかぢをたえ、よるべなき身ぞ悲しかりける。」とある中の一句で、さなきだに淋しい夕暮の空に、孤獨の身を悲むあまり、此歌を思出して誦したものである。歌意は、須磨の海人の捕逸を漕ぎ渡る舟の楫緒が絶えて、浪の上に漂うてゐるが如く、よるべなく漂浪してゐる我身が心に沁みて悲しい。上の句は、「よるべなき」と言ふ爲の序。◎心ふかげ。意味の深さうな樣子をいふ。◎所につけては。このやうな邊鄙な粗末な土地につけてはの意。

京には、十月になりて、御禊大嘗會などのいそぎに、天の下物さわがしう、くらづかさ、たくみづかさ、うち殿、そめ殿、何くれの道々につけて、かしがましうひゞきあひたるも、片つ方は涙のもよほしなり。悠紀主基の御屏風の歌、人々にめさる。書くべきもののなければ、かしこへ參れる行房の中將をや、召

醍醐帝方の人々は涙の種である。悠紀殿主基殿に立てる屏風の歌をば、人人に讀ませなさる。その歌を書き得る能書の人がないので、隱岐へ參つてゐる行房中將を、呼び返さうかなどと私議しなさるのを、隱岐の島では早くも傳へ聞かれたから、宵の內の物靜かな時に、御前に別して人も居らず、この行房朝臣だけが伺候して、昔の事今の事など樣々と御物語をなさる序に、後醍醐帝は、「都で其方をば呼び戻さうといふ事は、どうあるであらうか。若しも其方が呼び戻されもするならば、

し返されましなど、さゝめき給ふを、まだきに傳へ聞しめしければ、宵の間の靜かなるに、御前にことに人もなく、この朝臣ばかり候ひて、昔今の御物語の序に、「都にいふなる事はいかゞあらむとすらむ。さもあらばいとこそうらやましからめ。」と、うち仰せられて、火をつく〳〵とながめさせ給へる御まみの、忍ぶとすれどいたうしぐれさせ給へるを見奉るに、中將も心つよからずいとかなし。「いかばかりの道ならば、かゝる御ありさまを見おき聞えながらも、え聞えやらず。後夜の御行にさながらおはしませば、潮風いとたかう吹きけるに、霰の音さへ堪へがたく聞えて、いみじう寒き夜の氷をうち叩きて閼伽奉るも、山寺の小法師ばらなどの心ちぞするや。少將、この中將など、しきみを折りて參れる

も、「いつならひてか。」と、あはれに御覽ぜらる。今一度いかでつけても、深うおぼしおきつる事のみ數しらず。

◎くらづかさ。内藏寮のこと、禁中の御調度などを納めてある物倉を司る役。◎たくみづかさ。内匠寮のこと、中務省の被官で、工匠技巧の事を司り、公事の營繕等をも兼ね行ふ。ウチノタクミノツカサと讀ふ。◎うち殿。裝束の衣を打つて艶を出す所。源氏物語に「こゝかしこの打殿より參れる物どもを御らんじくらべて云々。」とある。河海抄に「裝束うつ所也、うち殿は、り殿などとてあり。」とある。◎そめ殿。禁中で用ゐる染物を調製する所。◎何くれの道々。内藏寮、内匠寮、打殿、染殿などや、其他大事會の時、特に設けられる出納所、書場所、小忌所、細工所、女工所、樂所、鳳笙所、和舞所、大炊所等の職員をさす。◎片つ方。後醍醐帝の中宮女房をはじめ、其方に心を寄せてゐる人々をいふ。◎惣記主基の御屏風の歌。惣記殿主基殿に立てる屏風には、惣記方主基方の國の名所を畫工に書かせ、歌人に歌を讀ませ、其歌を能書の人に書かせるのである。◎書くべきもの。歌を書く事の出來る能書の人。◎ふしこく參れる行房の中將。歴然圖く御供に參つてゐる行房中將のこと、行房は重事寺流の能書家である。◎行房の中將をや召しかくされまし。行房中將をお呼び寄せにならうか、どうしようなど。◎まだきに書く開しめしければ。行房を呼び寄せる評議のある事を、未だ其評議の決定もしない早い間に、歴然の處で書く開かれたからして。◎朝の間。朝夜のこと、日暮れてから間近いほどをいふ。一本に「よるの間」とある、夜中起きてゐる間のこと。◎都にいふなる事は云々。後醍醐帝の御詞、都で其方を呼び戻さうと評議してゐる事は、どうあらうとするのだらうかといふ意。◎さもおぼしたつ事もあるならば。共方が呼び戻される事もあるならば。◎火を…御まみの。燈火をよく〳〵。◎心に見守つて居られる御目元が。◎忍ぶとすれど。悲しさを我慢しようとするが。◎しづれさせ給ふる。目元が眞に赤ふ意。◎いかはあ…の道ならば。どれほど重大な筋ならば。此句の次に「都に殘りもしよう、書道ぐらゐの事ではおのが業の非な御有樣を見捨てゐることは出來ない。」といふ意を補つて聞く。◎え聞えやらず。感情が胸に迫つて申上げる事も出來ないといふ意。◎後の御行に…ましまさば。後々の御事をする時分で丁度おらさるゝであらう。後、死と…は、貴の時即ち今の午前四時の事をいふ。◎寺中での夜の勤行は、晝三度夜三

御目もとが、我慢しよう／＼と見つめて燈火をつくづくと見つめてゐるのをお見上申上げも心弱く、昔だ悲しいと。それほど重大な道であるならば、主上の物哀れなが御樣子を見奉りながら、面白くもない都にすアア殘らうと思ふてゐるのは、歸れない。」と思ふのも、胸迫つて申上げられないで。其時は丁度、後夜の御勤めをする時刻であらう。」と仰しやつて、ひどう激しく泣かれるから、主上は、

つまらぬ法師たちの心持のがするよ。忠顯少將や心持の行房中將などが、「いつ習うて」かくはするのであらうか。」と身に沁み打てゐる音までも非常に悲しい夜の水を打つまらぬ法師たちの心持のがするよ。忠顯少將や心持の行房中將などが、「いつ習うて」かくはするのであらうか。」と身に沁み打てゐる音までも非常に悲しい夜の水を折つて參つたのも、「枝を折つて參つたのも、

たゞ事ばかりが、眼前に浮べられる。

に、つけても、深く考へられる。

眞實の差別がわけられる時節の來るのを待つてゐる。

度て、壹は、晨朝、日中、黄昏、夜は、初夜、半夜、後夜の各三度宛てあつたのである。然るに、後世は大抵は半夜後夜を略し、又は晨朝を早めて後夜の勤ともするので、夜明けの勤を、後夜とも晨朝とも云ひ、又は後夜晨朝と重ねて云ふ事もある。◎閼伽たてまつるも、後醍醐帝の御樣子をいふ。閼伽の水を佛前に奉る水、即ち香花を入れた水をいふ。大日經疏、「閼伽水、此即香花之水。」如意輪儀軌、「由レ獻二閼伽香水一故、行者三業清淨、洗下除二煩惱一垢上。」◎山寺の小法師ばら。山中にある寺のつまらぬ法師たち。◎少將。前左少將忠顯。◎しきみ。佛前に供へる香木。樒の葉を蓮華の代用として佛に供へるのである。眞俗佛事編に、「樒の實はもと天竺より來れり。本邦へは延喜和尙の請來なり。其形天竺無熱地の青蓮華に似たり。故に之を取りて佛に供す。」◎今一度…わざもがなと。いま一度どうぞして天下を御心の思ひ通りに治める事があつて欲しいものであると。此句は下文の「深うおぼしまさる云々」につゞく。◎人の心のけぢめわかるゝにつけても。人の心のよしあしの差別が判明するにつけても。凡そ自分に對する人の心の誠實如何といふものは、自分が不運な逆境に立つた時に始めて表れるものである。後醍醐帝もかゝる逆境に立たれて、臣下の眞心のある者と無い者との差別を見分けられたのである。

【通釋】

都では十月廿五日に御禊の行幸がある。女御代には、大炊御門大納言冬信の女を出されると評判する。十一月十一日から五節の舞が始まる。後醍醐帝の御代には、この十一月が談天門院の御忌月に當つてゐたので、五節の舞も中止したから、淋しく物足らなかつたのに、此たびは珍しくて、年若い殿上人どもなどは、格別にうれしく思つた。隱岐の御門の御守役であつた吉田の一品定房も、今上陛下に仕へて五節の舞姫などを奉るが、心の中あはれに推量される。宣

都には十月廿五日御禊の行幸あり。女御代には、大炊御門の大納言冬信の女をいだされると聞ゆ。十一月十一日より五節はじまる。前の御代には、談天門院の御忌月にてとまりにしかば、さうゝしかりしに、めづらしくて、若きうへ人どもなど、心ことに思へり。隱岐の御門の御めのとなりし吉田の一品定房も、當代に仕へて、五節など奉る、心のうちぞあはれにおしはからるゝ。宣房の大納言（通顯）も、さるべき雜務の事などには出て仕へけり。春宮大夫は内大臣になりて、大嘗會の時もたかみくらの行幸に、前行とかやいふ事など勤め給ふ。右の大臣（兼季）も太政大臣になりて、清暑堂の御神樂に、琵琶つかうまつるなど聞えて、よろづめでたくあらまほしくて年もくれぬ。まことや、この卯（元弘二）月の頃より、年の名かはりにしぞかし。正慶とぞいふなる。

房の大納言も然るべき雜務の事などには出仕した。春宮大夫通顯は內大臣に昇進して、大饗會の時も、「たかみくらの行幸」に、前行とかいふ事などを勤めなさる。右大臣雅季も太政大臣になつて、淸暑堂の御神樂の時に、琵琶の役を勤めるなど評判して、萬事芽出たくて年も暮れた。ほんにマア此年の四月頃から、年號が改まつたぞよ。正慶といふのである。

【通釋】

大塔宮尊雲法親王や楠木正成などは、矢張同じ心

⊙談天門院の御忌月。談天門院の死なれた月。卽ち此月は故人の爲に遠樂を忌み愼むのである。後醍醐帝は、元應元年十一月十五日に御母談天門院が崩去せられた爲に、當月行ふべき五節の舞樂をば廢して行はれなかつたのである。普通に忌月といふは、三長齋月のことで、正五九の三月をいふ。卽ち正五九の三月は朔日から晦日まで每日持齋を續けるのである。⊙めづらしくて。五節の舞は後醍醐帝の御代の間長らく行はれなかつたのに、當代になつて久し振りて行はれるので、人々が珍しい事に思うたのである。⊙心ことに思へり。格別にうれしく思つた。⊙たかみくらの行幸。大嘗會の時、主上は卯日の夜、悠紀の正殿に臨ませられ、天皇親ら神饌淸酒を神祇に供へ、亦親らも御饌を奧せられ、其儀が終つてから一旦廻立殿に還御、更に主基の正殿に出御遊ばすのである。此悠紀主基の正殿に臨ませられる行幸を、たかみくらの行幸といふのである。「たかみくら」は天皇陛下のお就きになる御座。其形狀は鳳輦のやうであるといふ。⊙前行。先導役のこと。⊙此の卯月の頃。元弘二年の四月の頃。

大塔の宮、楠木正成などは、酒もなじ心にて、世を傾けむ謀をのみめぐらすべし。正成は、金剛山ちはやといふ所に、いかめ

で、北條氏討滅の謀を工夫するであらう。正成は金剛山千早といふ處に、嚴重な城を築いて、一通りならず猛き武士どもが澤山立籠つた。そして大塔宮の令旨だというて、諸國の武士を味方に引入れるから、北條氏に對して恨ある者などの、此處彼處に隱れたやうな樣である者どものありつたけが參集した。大塔宮は熊野にいらつしやつたが、大峰をつたうて、ひそかに熊野にも高野にも通ひなされして、然るべき場合々々には、よく人目に紛れて、猛き御有樣をのみ現はしなさるか

しき城をこしらへて、そもいはず武きものども多く籠りにけり。さて大塔の宮の令旨とて、國々の兵をかたらひとれば、世に恨あるものなど、こゝかしこにかくろへばみてをるかぎりは、聚りつどひけり。宮は熊野におはしましけるが、大峯をつたひて、忽び〳〵吉野にも高野にもおはしまし通ひつゝ、ざりげべきく〳〵まゐ〳〵には、よく紛れものし給ひて、武き御ありさまをのみ顯し給へば、いとかしこき大將軍にていますべしとて、附き隨ひきこゆるもの、いと多くなり行きければ、六波羅にも吾妻にも、いと安からぬ事と、もてさわぎて、まづかのちはやを攻めくづすべしといへば、つはものなどのぼり重なると聞ゆ。正成は聖德太子の御墓の前を、軍のそのにして、いであひかけひき、寄せつ返しつ潮のみちひく如くにて、年はたゞくれに暮れ

はてぬれば、春になりて事どもあるべしなど、いひしろふも、いとむづかしう、心ゆるびなき世のありさまなり。

◎世を傾けむ謀。北條氏の世を滅さうといふ謀。◎金剛山ちはや。千早城は河内國南河内郡金剛山の西麓に築いたのである。◎令旨。皇太子、三宮などから出る仰せを書いたもの、後世は、親王、法親王、女院などから出るものをも云ひ、明治になつてからは、皇族の御旨を凡て令旨といふ。又攝關家では家司を任補する時の文書を令旨といった。◎かたらひとれば。甘く説きすゝめて自分の味方にするといふ意。◎世に恨あるもの。北條氏の政事に對して恨のある者。◎かくろへ給ひてゐる樣子で。「かくろへ」は、隱れの延音、「ばみ」は、樣子のそれとあらはれる事をいふ。◎大峯。大和國吉野郡に在る釋迦嶽彌山等一帶の山脈をいふ。◎さりぬべきくまぐま。然るべき身を隱すことの出來るやうな人目に立たぬ場所。「くま」は隅の處、晴い處、蔭になつた處、人目につかぬ處などをいふ。◎忍び御ありさまをのみ顯し給へば。逆賊どもを討ち平げなどして猛き御業をなさる意。◎のぼり重なる。續倉から大勢の武士が幾重にも〳〵都へ上る事をいふ。◎聖德太子の御墓。こゝは聖德太子の舊蹟である天王寺をいふのであらう。

氣味わるく心の安まる時のない世の有樣である。

【通釋】

さてマア日野大納言俊光といふた人は、文保の頃に始めて大納言になつたのをば、大した榮達の事に、時の人々が言ひ騷ぐやうであつたに、その子が昨今院の執權で資名といふが、また大納言になつた。結構に父子二度までも度數を重ねたのが、ひどう大した事のやうである。後醍醐帝の御代にも、定房が一品に昇進し、宣房が大納言に任ぜられなどしたのをば、俊

太平記、楠出二張天王寺一事の段に、「楠其勢を并せて、七百餘騎にて、和泉河内の兩國を隔けて、大勢になりければ、五月十七日に、先づ住吉天王寺邊へ打出で、渡部の橋より南に陣をとる云々。」とある。聖德太子の御墓は、河内國南河内郡磯村大字太子に在る。◎軍のその。戰場。◎いであひかけひき。敵に出で逢ひ、追ひ退いたりといふ意。◎潮のみちひく。潮の滿干する意。◎事ども。合戰などをいふ。◎むづかしう。氣味わるく。◎心ゆるびなき。心のゆるまる事のない。安心の出來ない、油斷のならぬなどいふ意。

さても日野の大納言俊光といひしは、文保の頃、始めて大納言になりにしを、いみじき事に時の人いひさわぐめりしに、その子、この頃院の執權にて資名といふ、又大納言になりぬ。めでたく度をさへ重ねぬる、いといみじかめり。前の御代にも定房一品し、宣房大納言になされなどせしをば、かうざまにぞ人思ひいふめりし。内には女御もいまだ候ひ給はぬに、西寺園の故

内大臣殿の姫君、廣義門院の御傍に、今御方とかや聞えてかしづかれ給ふを、まゐらせ奉り給へれば、これや后がねと、世人もまだきにめでたく思へれど、いかなるにか御おぼえいとあざやかならぬぞ口をしき。三條の前大納言公秀の女、秀子三條とて候はるる御腹にぞ、宮々あまたいでものし給ひぬる、つひのまうけの君にてそおはしますめれ。

◎いみじき事。大した榮達の事。◎院の執權。院中の政務を總攬する者で、院の別當の中から之に補する。白河法皇が平忠盛源義家をして昇殿を許し院の執權としたのがその始めである。最初は執權は別當の中の事ら政事を取扱ふ者を云うたが後には一つの職掌となつて、同時に二人以上六人までも置いた事がある。◎いみじかめり。「いみじくあるめり」の約、「いみじあるめり」の「る」を省いたのである。◎かうざまにぞ。かゝるさまにぞ。後光や實名の昇進を大した事に言ひ囃いだと同樣、大した榮達であるといふ意。◎これや后がねと。この御方が后の候補者であるかと。「がね」は、やがて決着となるべき用意に備へてあるもの。◎言

房の御腹に、宮々が數多和生れ遊ばしたが、此皇子がつひには皇太子に備はる御方であらせられるやうである。

【通釋】

難波の島では、春が來ても、まだ浦風が寒く身に沁みて、浪荒く、渚の氷も解け難い四圍の景色に、後醍醐帝には、一層御心の晴やかでない事が盡きない。さゝやかな心細い御住居に、年までも忍つた事よとなさけなく思召される。伺候する人人も、暫時の間は元氣よく仕へてもゐたが、長い月日を經過しては、御心もひどう屈して終つた。

宮。奥仁親仁の兩親王及び廣女の御方をさすのであらう。◎つひのまうけの君。末始終は皇太子となるべき君。

第二十　月草の花

かの島には、春きてもなほ浦風さえて浪あらく、渚の氷もとけがたき世のけしきに、いとゞもぼしひすぼるゝ事つきせず、かすかに心ぼそき御すまゐに、年さへ隔たりぬるよと、あさましくおぼさる。候ふ人々もしばしこそあれ、いみじく屈じにたり。今年は正慶二年といふ。閏二月あり。後の二月の初めつかたより、とりわきて密教の祕法を試みさせ給へば、夜も大殿ごもらぬ日數へて、さすがにいたうこうじ給ひにけり。心ならず

どろませ給ふ暁がた、夢うつゝともわかず、彼宇多院ありしながらの御面かげさやかに見え給ひて、聞えしらせ給ふことおほかりけり。うちおどろきて、夢なりけりとおぼすほど、いはむ方なく名殘かなし。御涙もせきあへず「さめざらましを。」とおぼすもかひなし。源氏の大將、須磨の浦にて、父御門見奉り給ひけむ夢の心ちし給ふも、いとあはれにたのもし、いよ〳〵御心づよさそひて、かの新發意が御むかへのやうなる釣舟も、たよりいでもなむやと、待たるゝ心ちし給ふに、大堰の宮よりも、あま人のたよりにつけて、聞え給ふ事絶えず。

・◎月草の花。巻名は「露草の色をもかへつ月草の、うつればかはる花のさだめ。」といふ歌に因つて附けたもの。◎かの鳥、鹿茨の鳥。◎浦風さえて。浦風が身にしみて寒いといふ意。「さえ」は寒さが烈しくしみ渡る事をいふ。◎海の末もとけがたき意のけしきに。海に浮んだ氷も解け難い冷しい四季の景色につけて。末の果

今年は正慶二年といふ。二月に閏月がある。そこで法隆寺では格別に祈祷の記念をお催し遊ばすから、貴賤男女も御参詣にならぬ日數が多く續いて、一心に御勤まり遊ばされるとは言ふもの丶大層御疲労なされた。我心からでなく、思はずお眠りなされた體方、夢とも現ともわからず、後宇多院の御在世の時の御面影が明かに御見申さえなされて、お名殘り申さるゝ事が多かつた。目がさめて、夢であつたとおもひなさるゝまゝ、言ひやりもなく名殘が悲しい。御涙も止め切れなくなつて、

語「明石」の巻に、光源氏は明石との關係が原因となつて、京と須磨の流謫に遣けられた。それ以後花やかな生活を送つてゐる中、貴族多氏に生れ（父親宇多法皇）其關係は

古歌にあるが如く、「さめざらましを。」と思召すのも、源氏の大將が須磨の浦あたりなさつておいでなさるお心持がなさるのに、大堰の宮からも、遠夫のたよりに託して、色々と御消息を申上げなさる事が絶えない。

あゝ自分を置つて出て來るおもしろさ、待たれるおもしろさ、いよ〳〵明石の入道が、源氏の大將のお迎へに、

て、『なぜかゝる邊鄙な土地に居るのか、早く此處を去つて、住吉の神の導き給ふ所へ行け。』といふ靈があつた、かくて源氏は須磨を去つて明石へ行き、留ること一年有餘で再び都へ歸つたといふ事が見えてゐる。◎御心づよさまさりて。自分を迎へて都へ還らしめる氣もしい人が此世にあるやうに感じて、爲に氣强さが增したのである。◎かの新發意が。これも源氏物語「明石」の卷に、光源氏が須磨故院の夢を見たと同時に、一方明石の入道に對しても、早く船をよそうて源氏をお迎へせよといふ神の御告げがあつた。この明石入道は世に拗ねて明石に過歷してゐる者で、明石の上といふ絶世の美人を娘に持つてゐ、それを貴人に奉りたいといふ願望を抱いてゐた。入道は神の御告げがあると同時に、身を出して源氏を須磨から迎へて、明石の上を奉つたといふ事が見えてゐる。「かの新發意」といつたのは明石入道をさすのである。「新發意」はシンボチ、又はシボチとよむ。新に菩提を求める意を發する者を云ふので、初は在家出家共に通じる稱であつたが、後世は新に出家した者に限つて用ゐるやうになつた、一說に、「入道は三位以上の者の出家した者にいひ、新發意は四位以下の者にいふ。」などあるが詳かでない。◎たよりいできなむやと。自分をたよつて出て來るであらうかと。◎あま人のたよりの。漁夫などの往來するついで。◎聞え給ふ事。色々の計畫や宮自身の御樣子な

【通釋】都の方でも、矢張、御昧方の勢が强くて、世の中が鎭まりかねてゐる樣子に聞えるから、後醍醐帝も、萬の事に御心慰めて、警固の武士の寢る隙を窺うて逃げ出さうとなさるに、然るべきよい時節の到來したのであらうか、御垣守に伺候する武士どもも、脫出しようと企ててゐる主上の御樣子をば、微かにそれと悟つて、主上に隨ひ附かうといふ心が起きたから、同心の者だけ談合して、同月廿四日の曉に、うまくたばかつて人目を忍んで、お連れ出し申上げどを隱岐へ御知らせになるのである。

都にも、なほ世の中しづまりかねたるさまに聞ゆれば、よろづにおぼし慰めて、關守のうち寢るひまをのみうかゞひ給ふに、しかるべき時のいたれるにや、御垣守にさぶらふつはものども も、御氣色をほのみ心えて、靡きつかうまつらむと、思ふ心つきにければ、さるべきかぎりかたらひ合せて、おなじ月の廿四日のあけぼのに、いみじくたばかりて、かくろへ奉る。いとあやしげなるあま の釣舟のさまに見せて、夜ふかき空の暗きまぎれにおしいだす。折しも霧いみじうふりてゆくさきも見えず。いかさまならむとあやふけれど、御心をしづめて念じ給ふに、思ふかたの風さへ吹きすゝみて、その日の申の時にゝ出雲の國につかせ給ひぬ。こゝにてぞ人々心ちしづめける。おなじ

廿五日、伯耆の國稻津の浦といふ所にうつらせ給へり。この國に名和の又太郎長年といひて、あやしき民なれどいと猛に富めるが、類ひろく心もがもとへ宣旨を遣し給ひたるに、いとかたじけなしと思ひて、とりあへず五百餘騎の勢にて御迎へにまゐれり。又の日、賀茂の社といふ所にたち入らせ給ふ。都の御社おぼしいでられて、いとたのもし。それより船上寺といふ所へおはしまさせて、九重の宮になずらふ。これより國々のつはものどもに、御敵を亡すべきよしの宣旨を遣され、比叡の山へもの怨されけり。かくて隱岐には、いてさせ給ひにし妻つ方より、さわぎあひて、隱岐の守追ひて參るよし聞ゆれば、いとむくつけくおぼされつれど、こゝにもその心していみじう戰ひければ、引き返しにけり。

同月廿五日に伯耆國稻津浦といふ處にお移りなされた。この伯耆國に、名和又太郎長年というて、賤しい民ではあるけれども氣性も甚だ猛く富裕であるが、一族も廣く、心も賢く、重立つた者がある。彼の許へ勅を遣されましたに、甚だ勿體ない事であると考へて、早速五百騎餘の軍勢で、お迎へに參つた。翌日賀茂の社といふ所におはいりなさる。都にある賀茂神社が思ひ出されて、甚だ頻もしく感じる。それから船上寺といふ所へ行幸を仰ぎ、其處を禁中に擬して皇居とせられる。これから諸國の武士どもに、北條氏を亡せよといふ趣の勅をつかはされ、比叡山へも使をおのぼしなさつた。

京にもあづまにも、驚きさわぐさま思ひやるべし。正成が城のかこみに、そこらの武士どもも、かしこにつどひをるに、かゝる事さへそひにたれば、いよ〳〵東より上りつどゝめり。」

◎都にも云々。都に於いても、楠木勢や赤松勢が强くて、幕軍の爲に敗られず、世間が平穩になり乘ねてゐる樣であるやうに聞えるから。◎關守。關を守る人。或は出入する場所を守つてゐる人。伊勢物語に、「人知れぬわが通ひ路の關守は、宵々ごとにうちも寢なゝむ。」などあるのも後者の意。爰は菩提の武士をさして關守といふたのである。◎しかるべき時。適れ出るによい時。◎御垣守。本來、禁中の垣をいふのであるが、爰では島の御住居の垣をさす。「御垣守にさぶらふつはものの」とは衛士の事であるが、轉つて爰では菩提の武士をいふ。◎御氣色をばの心えて。後醍醐帝が此處を遁れ出でようと企てゝ居られる御樣子を覺に悟つて。◎歸きつかうまつらむと思ふ心云々。帝の御心に從ひ御供を申上げようと思ふ料簡が起きたから。◎さるべきかぎりかたらひ合せて。然るべき同心の者だけと相談して。◎いみじくたばかりて。ひどく巧に人目を欺いて。◎かくろへ奉る。人目を關れて天皇をお遁れ申す。◎夜ふかき空。曉には未だ餘程時間のある頃

このやうにして、隱岐では、主上の遁れ出でられた當頃から騷ぎ合うて、隱岐の守佐々木清高が、後を追うてまゐる趣を聽するから、甚だ氣味わるく思召されたけれど、船上山に於てもその用意して烈しく戰つたから、隱岐の守は引き返して終つた。都でも鎌倉でも、驚き騷ぐ有樣は想像されよう。正成の立て籠つてゐる千早城を圍むため、數多の武士どもが彼處に集つてゐるに、伯耆國に義兵が起り、主上の船上山に御いて遊ばすといふ事までも加はつたから、いよ〳〵鎌倉からも大勢の

武士が上り集るやうである。」

【通釋】

三月になつた。其十日過ぎ頃、俄に世間がひどう騷ぎ立つを、「何であるか。」と、聞いて見るに、「播磨國から、赤松則村入道圓心とかいふ者が、後醍醐帝の勅命に從うて攻め來るのである。」というて、都の中の者どもが周章狼狽する。光嚴帝は六波羅へ行幸せられ、後伏見花園の兩院も、亦同處

の空。「夜ふかき」とは古本に三更と書いてある、夜半過ぎてから曉に間のある頃をいふ。◎おしいだす。漕ぎ出す意。◎いかさまならむと。無事に彼岸へ漕ぐ事が出來るだらうか、どんなものであらうかと思はれて。◎念じ給ふに。祈像の加護を心に祈りなされるに。◎思ふかたの風。思ふ方向へ吹く風。順風。◎申の時。午後四時頃。◎稻津の浦。伯耆國八橋郡の海濱。元弘日記裏書には、「同月廿四日、主上出二御隱岐一、同日遷二座伯耆國稻津浦一云々」とあり、梅松論には「伯耆國奈和庄野津鄕」と見え、太平記には、名和湊としてある。◎名和の又太郎長年。名和行高の子で、又太郎は通稱、幼名を長高というた。伯耆國名和の地頭で、人となりが勇健で射に長じ、資産が豐饒、宗族が强盛であつた爲に、圖人に長屋されてゐた。◎類ひろく。一族の者が大勢であるといふ意。◎さかく〳〵し。賢意、すぐれてゐる意。神武紀に、「生而明達（サカシク）」仁德紀に、「叡（サカシクマシマス）智」などとしてある。◎むれ〳〵しき者。重立つた者。◎かれがもとへ。長年の許へ。◎猿澤の社。伯耆國河村郡賀茂郷鎭座。◎都の御計。京都の郊外にある賀茂神社。◎船上寺。船上山は伯耆國東伯郡に在る、その山中に智積寺といふがあつて、元弘帝の行在所となつた。船上寺とは智積寺のことであらう。此寺は明治維新の時に廢され、その佛守なる船上三所神祠のみが遺つてゐる。◎九重の宮になずらふ。禁中に擬して、其處を皇居とし住まはれる。◎比叡の山へものぼされけり。比叡山の衆徒へも、官軍に味方するやうにと、宣旨の使を遣られた。◎隱岐の守。佐々木清高のこと。◎むくつけく。恐しく。氣味わるく。◎正成が城のかこみに。正成の籠つてゐる千早城を圍み攻める爲に。◎かゝる事。後醍醐帝が隱岐の島を脫出して船上山に據つたといふ事。

三月にもなりぬ、十日あまりのほど、俄に世の中いみじうのゝしるを、何ぞと聞けば、播磨の國より赤松（則村）入道圓心とかやいふもの、先帝の勅に從ひて攻めのぼるなりとて、都の中あわてまどふ。例の六波羅へ行幸なる。兩院も御幸なるとて、上下たちさわぎ、馬車走りちがひ、武士どもうちこみのゝしりたるさま、いとおそろし。」されど六波羅の軍つよくて、その夜は、かの者ども引き返しぬとて、少ししづまれるやうなれど、！

へ御幸なさるというて、上下の者どもが騒ぎ立ち、馬や車が馳せちがひ、武士どもの立込んで騒いでゐる有様が、甚だ恐ろしい。されど、六波羅勢が強くて、その夜は赤松の勢は引返したというて、少しは鎭まつたやうであるけれど、このやうに言うて騒ぎ立つたから、なほ御油斷のないのであらうか、そのまゝ南院も主上も六波羅へ御滯留なさるから、東宮も離れて別に居られるのは、よくない事であるというて、廿六日に六波羅へ行啓せられる。内大臣が東宮の御車に陪乘なさる。

かやうにいひ立ちぬれば、猶心ゆるびなきにや、そのまゝに院も御門もおはしませば、東宮もはなれ給へるよろしからぬ事とて、廿六日六波羅へ行啓なる。内の大臣（源通顯）は久我の右の大臣（長通）にいますれど、大かたの儀式ばかりにて、よろづこの内大臣殿後見つかうまつり給へば、いまだきびはなる御程を後めたがりて、とのゐにもやがて候ひ給ふ。御修法のために法親王たちも候はせ給へり。こゝもかしこも軍とのみ聞えて日數ふるに、院よりの仰せとて、上達部殿上人までも、ほどほどに隨ひてつはものを召せば、弓ひく道もおぼ〳〵しき若侍などをさへぞ奉りける。げにひぢも折りぬべき世の中なり。

◎十日あまりのほど。十日過ぎ頃。◎赤松なにがし入道圓心。赤松則村のこと。薙髪して入道圓心と稱し、或は月潭と號した。元弘二年護良親王の令旨を奉じて

東宮の御守役は久我右大臣であらせられるが、此御方は大體の儀式に備はつてゐるだけで、萬事この内大臣通顯が御世話をなされるから、東宮のまだ幼稚な御年頃であるをば不安に感じて、宿直にも、通顯がそのまゝ伺候なさる。御修法を行はせ給ふ爲に、法親王達をも六波羅に召して居らせなされた。此處も彼處も、軍といふ事ばかり聞えて、日數を經過するに、院宣であるというて、上達部殿上人からまでも、その身分に應じて相當の武士を召集するから、彼等は月明る道も覺束ない年若

義兵を播磨國佐用莊言觀山に擧げ、更に後醍醐帝船上山に幸するや、則村は譜代の顯足利尊氏等と共に三面から六波羅を攻めた。◎先帝の勅に云々。事實は護良親王の令旨によつて兵を擧げたのである。◎かの者ども。赤松入道の軍勢。◎かやうにいひ立ちぬれば。赤松入道圓心が攻め止つたと仰山に言ひ立つたから。一旦世上に噂が立つたからはといふ意。◎そのまゝに。六波羅へ御出で遊ばしたまゝ其處に。◎御車にまゐり給ふ。東宮のお乘り遊ばしてゐる御車に陪乘せられる。◎大かたの儀式ばかりにて。久我右大臣は傳といふは大略の儀式だけで。即ち、表面上傳の職に居るだけで、實際の事務を執らないといふ意。◎後めたがりて。不安に思うて。◎御修法。天下安寧の爲の新禱を行はせられるのである。太平記に「此比四海大に亂て、兵火天を掠めり……是以二法威一猶臣を不レ傾ば、靜謐其期不レ可レ有とて、諸寺諸社に課し、大法秘法をぞ被レ修ける。親井宮は……禁裏に壇を立てゝ佛眼の法を行はせ給ふ。裏辻慈什僧正は、仙洞にて薬師の法を行はる云々。」とある。◎上達部殿上人までも。上達部殿上人までかゝるもの哉。◎ほど〳〵に隨ひて云々。身の分際に應じて、多いなり少いなり、いくらかづつの武士を召し集めるから。◎弓ひく道もおぼ〳〵しき若侍。弓矢の道にも明かでない年若い侍。◎ひぢも折りぬべき。白氏

長慶集新樂府に、「新豐折臂翁、新豐老翁八十八、頭雪眉皤皆似雪、玄孫扶向店前行、左臂憑レ肩右臂折、問翁臂折來幾年、翁云貫レ屬新豐縣、生逢二聖代一無二征戰一、慣レ聽二梨園歌管樂一、不レ識二旗槍與一弓箭一、無レ何天寶大徵レ兵、戸有二三丁一點二一丁一、點得驅將何處去、五月萬里雲南行、開道雲南有二瀘水一、瘴花落時瘴癘起、大軍徒涉水如レ湯、未レ過十人二三死、村南村北哭聲哀、兒別二爺娘一夫別レ妻、皆云前後征蠻者、千万人行無二一還一、是時翁年二十四、兵部牒中有二名字一、夜深不三敢使二人知一、偷將二大石一槌折レ臂、張弓簸旗俱不レ堪、從レ茲始免レ征二雲南一、骨碎筋傷非レ不レ苦、且圖二揀退一歸二鄉土一、此臂折來六十年、一肢廢レ廢一身全、至レ今風雨陰寒夜、直到二天明一痛不レ眠、痛不レ眠終不レ悔、且喜老身今獨在、不レ然當時瀘水頭、身死魂飛骨不レ收、應下作二雲南望鄉鬼一萬人塚上哭啾々上云々。」とある折臂翁の故事から、餘りに兵の徵發が激甚である爲に、衆人が徵集に堪へられないで、われと我身を傷つけて徵發を逃れようと企てさうになるといふ意。

かやうにいひしろふ程に、三月もくれぬ。四月の十日あまりに、又東よりものゝふ多くのぼる中に、をとどし笠置へもむかひたりし足利の治部大輔源高氏ぞのぼれりける。院にもたのもしく聞し召して、かの伯耆の國船上へむかふべきよし、院宣をたまはせけり。東を立ちし時に、うしろめたく二心あるまじきよし、おろかならず誓言のふみをしおきてけれども、底の心やいかゞあらむ、とかく聞ゆるすぢもありけり。この高氏は、いにしへの賴義朝臣のなごりなりければ、もとのねざしはやむごとなき武士なれど、承久よりこのかた頭さしいだす源氏もなくて、うづもれすぐしながら、頻ひろく勢四方にみちて、國々に心よせのもの多かれば、かやうに國の危き折をえて、思ひ立つ道もやあらむなど、したにさゝめくもしるくぞ見えし。伯耆の國へ向ふべしといひなして、先づ西山大原あたりに一とまりして、五月七日ほのぐ〳〵と明くるほどに、大宮の木戸どもおしひらきて、二條より下、七條の大路を東ざまに、七手に別れて旗

【通釋】このやうに言ひ合ふ間に、三月も暮れた。四月十日過ぎに、また鎌倉から武士が大勢攻め上る中に、一昨年笠置山へ討手に向つた足利治部大輔源高氏が上つた。後伏見院に於かれても力强く思召して、かの伯耆の船上山へ向ふやうにとの院宣を下された。高氏は鎌倉を出發する時も、幕府に對して疚しく異心のあるまいといふ趣を、一通りならず切に、誓詞文に認めて置いたけれど、心の眞底はどうであらうか、かれこれと噂する事もあつた。此高氏は古の賴義朝臣の後裔であつたから、元の種姓は竝々ならぬ武士であるが、永久以來、頭角を拔き出す源氏もなくて、世に埋もれて久しく

年を過しなどら、一族が廣く、勢が四方に充滿して、國々に心を寄せる者が多くあるから、このやうに國の危い時を得て、心に思ひ起す筋もあるであらうかなどと、內證に耳語するのも、耳語するに遑はず著しく見えた。伯耆へ出發しようと言ひ遣へて、まづ西山大原邊に一宿して、五月七日のほんのりと夜の明ける頃から、都の大宮通りにある門などを押し開いて、二條通りから下、八條通りまで、都合七條の大通りを、東の方向へ七隊に分れて、旗を揭げ連ねて、六波羅をさして雲霞の如くたなびき入るに、更におもてをむかふるものなし。この治部大輔、はやうより先帝の勅を承りてければ、さかさまに都を亡さむとするなりけり。關つくるとかやいふ聲は、雷の落ちかゝるやうに、地の底にひびき、梵天の宮の中も聞き驚き給ふらむと思ふばかり、とよみあひたるさま、來しかたゆくさきくれ惑ひて、物覺ゆる人もなし。御門、東宮、院のうへ、宮たちなど、ましてひとりさかしきもおはしまさず、絲竹のしらべをのみ聞し召しならひたる御心どもに、珍らかにうとましければ、たにあされ給へり。武士どもも、なかばは金剛山へ向ひたれば、さならぬのこり、都にあるかぎりは戰ひをなす。今をかぎりの軍なれば、手を盡してのゝしる程、まねびやらむ方なし。雨のあしよりもしげく走り

雲霞の如く引くが如く流れ込むに、面を向けて防禦する者がない。この治部大輔は以前から後醍醐帝の仰を承つて居つたから、反對に都を亡さうとするのであつた。

關をあげるとかいふ聲は、雷の落ちかゝるやうで、地の底に響き、梵天王の宮殿の中でも、聞き驚かれるであらうと思ふ程、鳴り響き合うた有樣は、前後の區別もつかなく茫然として、正氣のある人もない。天皇、東宮、院の上、宮がたなどは、まして一人として分別のある者もいらつしやらぬ。警蹕の聲をばかり

ちがふ矢にあたりて、目のまへに死をうくるもの數を知らず。一日一夜いりもみとよみあかす。兩六波羅にも殘る手なく防ぎつれど、遂に陣の中やぶれて、今はかくと見えたり。日ごろぶらひ籠り給へる上達部殿上人なども、今日と思ひまうけたらむだに、君のおはしまさむ限りは、いかでかまかでも散らむ。ましてかねてより、かくかまへけるをもしろしめさで、昨日かとよ、當代の宣旨をたまはりしものゝ、かくうらがへりぬれば、誰か思ひよらむ。すべて上下となく、ひとつに立ち込みて、あわて惑ひたり。

◎足利の治部大輔源高氏。足利尊氏のこと。彼は初名を高氏といつたが、後に後醍醐帝の諱を賜はつて尊氏と改めた。源義家の次子義康の裔である。「治部大輔」は治部省の次官。「治部省」は、五位以上の婚姻、饗宴、葬禮を掌じ、喪葬を記し、陵墓を守り、鄽肆を正し、僧尼を制し、奏祥を待遇し、姓氏の學紋を判斷す

京都の六波羅勢を滅さうと謀つて居た事が六波羅に伺候して居た上達部殿上人などゝも、今日滅亡すると聞いて、皆心ならずも、或は一門に引き連れられて、或は主上の御書なり、或は院宣なりを、我も我もと賜はつて、取る物も取敢ず、我先にと六波羅を指して落行く有様は、譬へば、猛火の燃え移つた家の内から、我先にと逃げ出す人の如く、又は、雨山の如く降つて来る矢を、我先にと防ぐ武士の如くで、門の内外は、立錐の地も無い程に込合つて、東西に奔走する馬の鞭の音、南北に馳違ふ車の轅の軋る音、天地も響き渡つて、譬へやうも無い騒ぎである。

今はいよ〳〵最期の時と見えた。

に軍勢を打寄られて、

は期を始める時に、敵に囲まれて合圍の裏に落ちるのである。⊙囲つくる。囲の星をいふ。囲の星を落すの意。「囲

を、囲をつくる、囲をつくる、敵が囲の星に應じて変ずるのをいひ、敵を囲を合すといひ、囲の星を落すといひ、勝利の時を、敵を囲を合すといふ。真文集記、「このこゝろの事、攻め合ひ攻め合ひによつて、敵を囲を合する也。これ合圍ずんばあるべからずといふ事。

ず、合圍の最初に囲をつくれば、敵も囲を合する也。

を敵に告ぐる合圍なり。敵も囲を合するは心得たる合圍なり。⊙発天の宮。「発天」は欲界の苦欲を離れた清浄の天をいふ。発天を三天に別け第一を発天、第二を輔天、第三を大発天といふ。発天の宮とは、発天を三天に別け第一を発天、第二を輔天、第三を大発天といふ。発天の宮殿のこと。⊙とよみたるまゝ。鳴り響き合ふ音。

発天といふ、その大発天王の宮殿のこと。⊙とよみたるまゝ。鳴り響き合ふ音。

た有様。⊙楽しやかたゆくさくれ遊びて。後の方も前の方も、心が晴〳〵なつて、

區別がわからなくなるといふ意。⊙ひとりさかしもいふ云々。一人とし心の明かな分別のつく者もうつゝやうにしやうにも。⊙練竹のしらべ。琴笛の調。⊙らうたきし。

思ふ様はしくる意。⊙きなりぬのこゝろにあるまゝ。金剛山一向はない踊。

の都に居るあるけの者。このこゝろの天に」のの手を舞ひ舞ひ。⊙手を舞してあらゆる方法を舞して。⊙まれびもう方なし。人に共着を着して舞ひ舞ひ。

知なく、昨日も今日も御存の宣旨を下されたのも御存

高代光厳帝の宣旨を下されたのも御存

やうに逆に反旗を翻したのも、誰か今日

ぞ。さうであるから、誰か今日

奏しようと考へ附かう日

もしてゐて居つた事切りの心様

を退出して散り〳〵に逃げ失せて、主上の御書なり、院宣なりを、我も我もと賜はつて、取る物も取敢ず、我先にと六波羅を指して落行く有様は、譬へば、猛火の燃え移つた家の内から、我先にと逃げ出す人の如く、又は、雨山の如く降つて来る矢を、我先にと防ぐ武士の如くで、門の内外は、立錐の地も無い程に込合つて、東西に奔走する馬の鞭の音、南北に馳違ふ車の轅の軋る音、天地も響き渡つて、譬へやうも無い騒ぎである。

今はいよ〳〵最期の時と見えた。

に軍勢を打寄られて、

は期を始める時に、敵に囲まれて合圍の裏に落ちるのである。⊙囲つくる。囲の星をいふ。囲の星を落すの意。「囲

を、囲をつくる、囲をつくる、敵が囲の星に應じて変ずるのをいひ、敵を囲を合すといひ、囲の星を落すといひ、勝利の時を、敵を囲を合すといふ。真文集記、「このこゝろの事、攻め合ひ攻め合ひによつて、敵を囲を合する也。これ合圍ずんばあるべからずといふ事。

ず、合圍の最初に囲をつくれば、敵も囲を合する也。

を敵に告ぐる合圍なり。敵も囲を合するは心得たる合圍なり。⊙発天の宮。「発天」は欲界の苦欲を離れた清浄の天をいふ。

き者も卑しき者も、すべて同様に混雜して、周章て惑うた。

【惡黨】

終日、八幡、山崎、竹田、宇治、勢多、深草、法性寺などで燃え揚る煙どもが、四方の空に充滿して、日の光も見えない、恰も墨をすり流したやうで日が暮れた。六波羅にも火がついて甚だ心外な

らう方法がない。◎いりもみ。入り亂れて揉み合ふこと。◎陣の中。武士の屯集して防いでゐる中。◎今はかくと見えたり。今はかく滅びる時だと見えた。◎今日と思ひまうけたらむだに。今日が最後と心構へをして居たであらう者ですら。今日が北條方の滅亡する時だと用意をして居たであらう者すら。◎かねてよりかくかまへけるをも云々。高時が以前から北條方に反抗をしようと用意してゐたのをも、後伏見院には御存知なくて。◎昨日かとよ。昨日であるとかいふ事だ。實は、高氏に伯耆に發向する旨の院宣を下されたのは、四月十六日である。◎うらがへり。謀に反旗を翻す意。◎誰か思ひよらむ。誰が今日六波羅の滅亡するのだと思ひ付かうぞ、思ひ付きはしない。

日ぐらし八幡、山崎、竹田、宇治、勢多、深草、法性寺などに、もえあがる煙ども、四方の空にみち〳〵て、日のひかりも見えず、墨をすりたるやうにて暮れぬ。こゝにも火かゝりていとあさましければ、いみじう固めたりつる後の陣を、辛うじて破りて、それより免れ出てさせ給ふ御心ちども、夢路をたどる

事であるから、大層驚きに取圍んでゐた後方の敵陣をば、やう〳〵の事で打破つて、其處から脫れ出られる御心持など、夢の中に路を探り〳〵して行くが如く、現とも思はれないであらう。主上も甚だ粗末な御姿に、わざと身なりを見すぼらしくなさるのが、ひどう不吉である。後伏見花園の兩院も、互に御手をとり合ふといふ程の御有樣で、人に扶けられ扶けられして六波羅を脫れ出でなさる。上達部大臣たちは袴の裾をとつて、冠などの常ちて行くのも知らずに、空を歩くやうな正氣

やうなるべし。內のうへも、いとあやしき御姿にことさらやつしたてまつる、いとまが〳〵し。兩院も御手をとりかはさるといふばかりにて、人にたすけられつゝ出でさせ給ふ。上達部大臣たちも、袴のそばとりて、冠などの落ちゆくも知らず、空をあゆむ心ちして、あるは河原を西へ東へと、樣々散り〳〵になり給ふ。兩六波羅仲時時益東をさして、あづまへと心がけて落ちければ、御幸もおなじさまになし奉りけり。西園寺の大納言公宗は北山へおはしにけり。右衞門督經顯、左兵衞督隆蔭、資明の宰相などは、御幸の御供にまゐらる。按察の大納言資名は、足を損ひて、東山わたりにとまりぬなどいひしは、いかゞありけむ。內通顯大臣殿は、御子の別當通冬を伴ひ給ひて、八日のあけぼののいまだ暗きほどに、我が御家の三條坊門萬里小路におはしましつき

のない心持で、鴨河原を或は西へ或は東へ、樣々散り〳〵に遁げなさる。兩六波羅探題の仲時時益は、東を指して鎌倉へと心がけて落ち逃げたから、御幸も同じ方向へ成し奉つた。西園寺大納言公宗は北山へ御出でになつた。右衞門督經顯、左兵衞督隆蔭、資明の宰相などは、御幸の御供をして參られる。按察大納言資名は、足を怪我して東山邊で止まつたなど言うたのは、眞實どうあつたらうか。內大臣殿は御子の別當通冬を伴はれて、八日の曙の未だ薄暗い頃、自分の御家の三條坊門萬里小路に御到着せられたに、內大臣及び別當の門の中へ歩み入る間をも待遠く感じて、奥方は門へ走り出でて、平穩無事で御歸宅遊ばしたと思ふ嬉しさに、周章てゝ見ると、內大臣は御直衣に指貫の裾を高く括り上げていらつしやつたから、その人といふ事が明かにお見えなさる。別當通冬は、途中人目を隱れるせんすべなさに、折烏帽子に布直垂といふものを着て、小さいからだつきの年若い人が、御前駈の中に混つてゐたから、どれが通冬であるか、急にも見えない。わざ〳〵松明

たるに、歩み入り給ふほども心もとなくて、北の方、門へはし り出でて、平かにかへりおはしたると思ふ嬉しさに、急ぎて見 れば、おとゞは、直衣に指貫ひきあげ給へれば、しるく見え給 ふ。別當は、道の程のわりなさに、折烏帽子に布直垂といふも のうち着て、細やかに若き人の、御前どもにまぎれたれば、と みにも見えず。火などもわざとなければ、暗きほどのあやめわ かれねに、はやういかにもなら給へるにやと心ちまどひて、北の方は、いかに〳〵と聲もわなゝきて聞えけり。いとことわりに いみじうあはれなり。さて御幸（ミユキ）は近江の國におはします程に、 伊吹といふほとりにて、なにがし（守良）の宮とかや法師にていましけ るが、先帝の御心よせにて、かやうのかたも、ほの心え侍りけ るにや、待ちうけて矢を放ちたまふ。又京よりも追手かゝるな

ど聞えければ、六波羅の北といひし仲時、內、東宮、兩院を具し奉り、番馬といふ所の山のうちに入れ奉りぬ。手のものども猶殘りて隨ひつきけれども、戰ひもかなはずやありけむ、遂にこの山にて腹切りにけり。おなじき南時益といひしは、これまでもまぬらず、守山の邊にて失せにけりとぞ聞えし。あやなくいみじき事のさまなり。御所々々の御供には、俊實の大納言、經顯の中納言、賴定の中納言、資名の大納言、資明の宰相、隆蔭などぞ殘り候ひける。俊實、資名、賴定などは、やがてそこにて髻切りてけり。一院（後伏見）は、歸り入らせ給ふ。御門に御文をまゐらせ給ひて、御出家あるべしなど申させ給ひけれども、思ひもよらぬよしを、かたく申させ給ひけるとかや。

◎八幡。山城國綴喜郡にある。◎山崎。山城國乙訓郡にある。◎竹田。山城國紀

伊都に在る。◎宇治。山城國久世郡にある。◎夢川。近江國栗太郡夢田川の事にある。◎渡辺。山城國葛飾郡伊都にある。◎法性寺。山城國愛宕郡にある。◎盧をすりたるやうにて。黒髪の髪に空も曇り、始も晩をすり流したやうで。◎こゝに路を辿る。やうなボンヤリと果敢ない心持がすることであらう。◎やつし。衣服などを粗末にする意。◎まが〳〵し。不吉である。◎兩院も御手を……ばかりにて。後伏見花園の兩院も互に御手を取り合ふといふ程の有様で。御車にも召されずに徒歩で御出かけになる御様子をいふのである。◎裕のそば、裕の端。◎空をあゆむ心もちして。空を歩くやうな正氣のないボンヤリした心持がして。◎河原。賀茂の河原。◎おなじさま。同じ方向。◎歩み入り給ふほども心もとなくて。北の方は、内大臣通顯別當通冬が門の中へ歩いて這入られる間も、待遠しく思うて。◎平かに。平穏無事に。恙なくて。◎直衣に指貫ひきあげ給へれば。直衣を脱、指貫を穿ち、その指貫の裾の括りを高く括り擧げて居られたから。◎しるく見え給ふ。通顯だといふ事が著しく目につきなされる。◎道の程のわりなさに。道中の人目を紛らす設ん術のなさに。◎折烏帽子。常の立烏帽子を折つたもの、

俗にいふ烏帽子の事。その折り様は家々によつて様々の様式がある、古今集遠鏡に「烏帽子の古製は、柔なりし故、風に吹かれて折れしかば、その儘をうつし製し、こはくなりても、わざと折りて折烏帽子とは名付けしなり。」とある。◎布直垂。布で製した直垂。徳川時代には、この布直垂に家紋を付けたのを大紋と稱へた。◎細やかに若き人の。別有清冬を形容した句。細やかとして年若い人が。◎御前ども。御前達どものこと。主君の外出の時、供などよりも先へ行く、先供のこと。◎火なども云〻。松明なども故意にともさなかつたのである。◎あやめわかれぬに。物の文目も區別が出来ない程に。実は、人の姿様子などを見分ける事の出来ない事をいふ。◎はやらいかにもなり給へるにやと。通冬は、実に途中で、どのやうにもなつて失せたのであらうかと考へて。◎いかに〳〵と。通冬はどうしたのか〳〵と。◎疾もわなゝきて聞えけり。聲もふる〳〵ふるへて叫ばれた。◎伊吹。近江國と美濃國とに跨る山で、史上には、日本武尊東征の折、この山に賊を平げて病を獲た事で名高く、また古〻和歌の名所として著れてゐる。後拾遺集に「かくとだにえやは伊吹のさしも草さしも知らじな燃ゆる思を。」◎なにがしの宮。桓山帝の皇子、兵部卿守貞親王のことゝ五法宮というた。◎主君のかたの事。当夫の方面の事の御心よせにて。主君後醍醐帝の御方の事で。◎あやうのふた。当夫の方面の事

新宮、新嘗中新宮、頭定中新宮、頂宝大宮の御供には、「医、主上、殿下中に御入れ申上げた。御局といふ所の山の上、東宮、両院をお迎れ申上げた。まだ生き御局ともいふ。◎御出ましで御幸は近江國に御出ましで、後は京都から北六波羅の南探題時益と六波羅の南方の御供をした。同じき六波羅に置いて、守山道まで送つた。◎いかゞ、とうへ〳〵この山で切り死んでおうたと申した。

ばれた。◎いかゞ、とうへ〳〵この山で切り死んでおうたと申した。

ばれた。◎いかゞ、とうへ〳〵この山で切り死んでおうたと申した。

ばれた。◎いかゞ、とうへ〳〵この山で切り死んでおうたと申した。

ばれた。◎いかゞ、とうへ〳〵この山で切り死んでおうたと申した。

柄。◎京よりも追手かゝるなど。高氏の方からも追手が道ひつくなど。◎六波羅の北といひし仲時。六波羅の北方の探題と言うた仲時。◎番馬。近江國坂田郡にある。◎手のものども。部下の者ども。◎おなじき南時益。同じ六波羅の南方の探題なる時益。◎守山。近江國滋賀郡にある。太平記、俊基朝臣再關東下向事の條に、「時雨もいたく森山の、木下露に袖ぬれて、風に露散る篠原や云々。」とある。◎あやなくいみじき事。すぢなくひどう情ない事。◎御所々々の御供。院主上皇宮の御供。「御所」は天皇、上皇、三宮等の御住所をいひ、轉じては直に其人を指していふ。然し後世は、親王、大臣家以上、將軍、關東公方及び其一族、又は諸大名中の重なる者などの住所、或は其人を稱へるやうになつた。◎俊實の大納言。俊實の中納言の誤であらう。◎資明の宰相。「資明の中納言、宰相隆蔭」とあるべきであらう。◎御出家あるべしなど云々。主上に御出家遊はすがよからうなど御勸め申されたけれども。◎思ひもよらぬよし。とんでも無い事であるといふ旨。

伯耆の御所へは人々參りつどふ。上達部殿上人數しらず。さる程に、東にもかねて心しけるはや。尊氏の末の一族なる新田小四郎義貞といふもの、高氏の子の四つになりけるを、大將軍にして、武藏の國よりいくさをおこしてけり。この頃の東の將軍は、守邦親王にておはします。御後見つかうまつる高時入道、貞顯入道、城介入道圓明、長崎入道圓基などいふものども、驚きさわぎて、高時入道の弟に四郎左近大夫泰家といひし、今は入道したるをぞ、大將に下しける。五月十四日、鎌倉を立ちてむかふ。その勢十萬餘騎。高時入道の一族、附き隨ふものどもそこらみちひろごりて、鎌倉のはじまりし賴朝の世、時政より今にいたるまで、多くの年月をつめり。僅なる新田などいふ國人に、たやすくいかでかは亡ぼさるべきと覺えしに、程なく十五日に、かたき既に鎌倉に近づくよしきこえて、家々を燒ちさわぎのゝしる。世の既に滅するにやとおぼえしとこそ、人はかたり侍りつれ。四郎左近大夫入道、軍にうち負けるにや、隨ふ

納言、資名大納言、資明中納言、宰相隆蔭などが殘つてお附き申しました。其中でも、俊實、資名、賴定などは、其處で落飾して終つた。後伏見院は、都へ還御せられる。光嚴帝に御手紙を奉られて、「御出家なさるがよからう。」などと、お勸め申上げられたけれど、主上は出家などとは思ひもよらぬ事であるといふ旨を、堅く申されたとかいふ事である。

【通釋】
伯耆の船上山の御所へは人々が參集する。上達部や殿上人は數も知れない。さうして居る間に、

關東に於ても、前以て用意してゐたのであらうか、高氏の末の一族である新田小四郎義貞といふものが、今の高氏の子の四歳になつたのを大將軍にして、武藏國に義兵を擧げた。北條の鎌倉の將軍は守邦親王でいらつしやる。その御後見を致す高時入道、自顯入道、城介入道圓明、長崎入道圓基などいふ者どもは、驚き騷いで、高時入道の弟で四郎左近大夫泰家といふ、今では出家してゐる者をば、大將として下した。五月十四日に鎌倉を立つて討伐に向ふ。その軍勢は十萬餘騎であ

武士とも、遂りなく新田が方へつきぬれば、その日ぐのこと
ばかり五六百騎にて、十六日の夜に入りて鎌倉へ引きかへす。
値に中一日にてかへりぬることゞ夢かとぞおぼえし。かくて、
日々の軍にうち負けければ、あなたも十一日、高時以下殿切り
て失せにけり。

◎伯耆の国府。◎給上山の城所のこと。◎実に。◎軍に於いても。◎心しけるに
や。真西呼寄して北條氏を滅さうといふ用意をしてゐたのであらうか。◎新氏の
一族なる新田小四郎義貞。義、家、の三字に義、國と云ふがあり、その五子義、貞、
は新田太郎と称、共子孫みな新、田、を以て氏とした。義貞は義重の孫である。
そして足利氏は義貞の後裔であるにも拘らず、新田氏を以て尊氏の系の
一族と云うたのは、尊卑新田氏は源頼義が嫡男義朝と始はその頃に、官位も上総
すこを得ず不遇であつたに引きかへ、足利氏は代々北條氏の女を妻つて族勢が盛
んであつたから、族勢消長の點から、その一族と云うたのであらう。◎高氏の子。
足利尊氏のこと。始し、尊氏が尊氏を改めて大将軍としたからのは誤である。
◎武蔵國より云々。尊氏が武蔵國から挙を起したといふのは誤である。尊氏は元
弘三年に正成の千早城を圍んだが、茲に勤王の大志を抱いて、護良親王の令旨を
受け、馳つて病と称して我が本國なる上野國に帰り、義兵を挙げたのである。◎
守邦親王。一品久明親王の御子。◎高時入道。高時は嘉暦元年二月出家して、執
權職をは相模守時に譲つたので、表面上の政見役ではなかつた。◎貞顕入道。
貞顕も嘉暦元年四月出家して政事を止めた。◎高時入道の一族……年月をつめ
り。高時入道、即ち北條氏の一族、及び其一族の者に附き隨うてゐる家の子郎等
の者共は、深山幽谷に充滿し雲雨して、然も其參宗譜主從の關係は、鎌倉幕府の
創つた頼朝の時代の北條時政から今日に至るまで、百五十年の年月を積んで、基
礎が堅固になつてゐる。◎國人。諸國に生ひ立つた人々。田舎の豪族をさす。
人。其時の有様を目撃した人。◎えさらぬものどち。のがれ得ぬ者どち。北條方
を逃れる事の出来ぬ密接な關係の者どち。◎かくなりぬること。かく北條方が敗
亡して、新田氏に内應する者が多く、僅かに五六百騎になつてしまつたこと。

さて都には、伯耆よりの還御とて、世の中しめく。さう東寺く
入らせ給ひて、事どもさだめらる。二條の前の大臣召しあり

四條左近大夫入道は責め責めたのであらうか、陣に
出ふ武士どもは全部新田の方へ馳參したから、
六百騎で、十六日の夜に五
値かに四を一日延いただけ
思はになつたからは、夢念な歎
て、連日の戦に敗北しにしと
つた。
時以下の者は自殺して終高た

【評釋】
さて都では後醍醐帝が伯
耆から還幸なさるといふので、
て、半面の者が喜々と喜

ぎ立つ。まづ車駕は東寺へ入御して、還御其他の儀式をば定められる。二條の前の大臣道平が御召しがあつて參られた。此度内裏へ入御遊ばすべき儀式は、重祚などの儀であるでおらうけれど、陸岐にあらせられる間、神璽をば御身に添へて放さずに居られたから、只遊所への行幸の還御の儀式であらうといふ事に定められる。關白をば置かれまいから、二條の大臣が氏長者の宣旨を蒙つて、都の事をば管領せよといふ御旨を承はる。天下の事は、只この二條の大臣の御心通りであらうといふて、この節の親族どもは喜び合うた。

六月六日に、東寺から、普通の行幸の儀式で、内裏へ入御なされた。結構であるといふも、言ひ現はすべき適當な言葉がない。「去年の春はひどう物哀れであつたよ。」と思出すのも、此度は譬へやうもない程嬉しい。今も御供の武士どもが、去年都を出られた時よりも、なほ晴れ晴れとなく澤山に取圍み申上げてゐるのは、並だ恐ろしい有樣であるけれど、此度は氣味わるくも見えないで、却て頼もしくて結構な護衛であるよと思はれるのも、不審なれば、みなさぞあるかし。先陣は二條富小路の内裏につかせ給ひぬれど、後陣の兵は、猶東寺の門まで續きひかへたりしとぞ聞えしは、まことにやありけむ。正成もつかうまつれり。かの名和の又太郎は伯耆守になりて、それも衛府のものどもにうちまじりたり。めづらしくさまかはりてゆすりみちたる世の氣色、かくもありけるを、などあさましくは歎かせ奉りけるにかと、めでたきにつけても、猶前の世のみぞゆかしき。車などたち續きたるさま、ありし御くだりにはことよなくまされり。物見ける人の中に、

昔だにしづひうらみをおきの海に、
むかしの事など思ひあはするにやありけむ。金剛山なりし東の

武士ども、さながら画を写して居るやうにて、声のはじめもかくやと見えたり。

◎夏寺へ入らせ給ひて。天子の御車が夏寺へお這入りになり、其處にお住ゐあつてといふ意。◎高井なにてあるやうなれども。後醍醐帝の御位にあらせられた御留守中、光嚴帝が御位におはしました事であるから、今度は後醍醐帝が御位に復せられるには、「高井にといふ樣式であらうけれどもといふ意。「高井」とは、時と神とをいひ、天子が再び御位をられる事をいふので、後醍醐帝が高井して資朝天皇と神せられたのが、我國に於ける高井の始である。◎國の華。高貴を人れ尊き神であるが、爰では勿論、國のことをいふ。◎氏長者。「氏の上」「氏の長」などいふ意。◎氏中の宗長で、帝に其同族を尊ぶて朝家に仕へ、また國内の人民を氏人と同じて、氏中の宗長で、帝に其同族を尊ぶて朝家に仕へ、また國内の人民を氏人の統治等を掌つた。かゝこの「氏長者」は、最初は宗家統領の稱であつたが、後世は次に、「者」の「官」を贈つて、始めて之を稱する事が出來るやうになつた。當時代には其稱も甚く、藤原氏八氏姓及び源氏の族支大姓等となる者のみが之を稱へた。書經舜典に「慎徽五典、五典克從、納于百揆、百揆時叙、賓于四門、四門穆穆、納于大麓、烈風雷雨弗迷、帝曰、俞、往哉汝諮、四岳、朕在位七十有載、汝能庸朕位、朕德罔克、四岳、朕在位七十有載、汝能庸朕位、朕德罔克、」とある。出帝に「國」を重ねたらしめる事に、「國」の字がつけてあるのである。◎華。

◎夏寺へ入らせ給ひて。天子の御車が夏寺へお這入りになり、其處にお住ゐあつてといふ意。◎高井なにてあるやうなれども。後醍醐帝の御位にあらせられた御留守中、光嚴帝が御位におはしました事であるから、今度は後醍醐帝が御位に復せられるには、「高井にといふ樣式であらうけれどもといふ意。「高井」とは、時と神とをいひ、天子が再び御位をられる事をいふので、後醍醐帝が高井して資朝天皇と神せられたのが、我國に於ける高井の始である。◎國の華。高貴を人れ尊き神であるが、爰では勿論、國のことをいふ。◎氏長者。「氏の上」「氏の長」などいふ意。◎氏中の宗長で、帝に其同族を尊ぶて朝家に仕へ、また國内の人民を氏人と同じて、氏中の宗長で、帝に其同族を尊ぶて朝家に仕へ、また國内の人民を氏人の統治等を掌つた。かゝこの「氏長者」は、最初は宗家統領の稱であつたが、後世は次に、「者」の「官」を贈つて、始めて之を稱する事が出來るやうになつた。當時代には其稱も甚く、藤原氏八氏姓及び源氏の族支大姓等となる者のみが之を稱へた。書經舜典に「慎徽五典、五典克從、納于百揆、百揆時叙、賓于四門、四門穆穆、納于大麓、烈風雷雨弗迷、帝曰、俞、往哉汝諮、四岳、朕在位七十有載、汝能庸朕位、朕德罔克、四岳、朕在位七十有載、汝能庸朕位、朕德罔克、」とある。出帝に「國」を重ねたらしめる事に、「國」の字がつけてあるのである。◎華。

武士ども、さながら画を写して居るやうにて、声のはじめもかくやと見えたり。

金剛山に居つた鎌倉の武士どもも、すべて頭を垂れて恭順の意を表し、争うて降参する有様は、漢の高祖が關中へ入り込んだ時、秦の將士の降を請うて來たのも、このやうであつたかと思はれた。

【通釋】

禮成門院もまた中宮と申される。六日の夜もなく内裏へお入りになる。中宮は先年御剃髪遊ばした。御病氣がまだ御快癒なさらないから、いつの間にか五壇の御修法を始められる。八日から政事の議定を行はれる。以前の人々が悉く議定の席へ參集する。十三日に大塔の宮尊雲法親王が都へお入りなさる。昨今御髪の毛を長く生したてて、一通りならず立派な男になりなされた。唐の赤地の錦の御鎧直垂といふものを御召しになつて、御馬に乘つて御出でになるから、御供に立派な武士が護衛して、花やかな事は、後醍醐帝の供奉であつた武士にも、殆ど劣らないやうである。遠に征夷大將軍の宣旨を蒙られた。關東へ流された人々が、間もなく免を蒙つて

きになつたのかと思はれて。◎軍。勝見軍のこと。◎晉武に。晉武、晉の神武の尊い時ですら、後鳥羽上皇は隱岐の島に流されて、其處に憂悶を殘し置いて一生を終へられたのに、今隱岐の海に波の寄せては返すが如く、都に還御せられた後醍醐帝の御威武は恐れ多い事である。「おきの海」に「置く」といふ意と「隱岐の海」とを言ひかけ、海の縁語で「波たちかへる」と言ひつゞけて、波の寄せては返るのに主上の都へ還御せられる意を含めてゐる。◎むかしの事。後鳥羽帝の折のこと。◎金剛山なりし。金剛山千早城にあつた。◎さながら。そのまゝすべてといふ意。◎頭を垂れ。恭順の有様をいふ。◎漢のはじめ。漢の高祖が函谷關を破つて關中へ還入つた時、秦の將士が降參して來た時の有様をいふ。

禮成門院も又中宮と聞ゆ。六日の夜やがて内裏へ入らせ給ふ。いにし年御ぐしおろしにき。御惱なほおこたらねば、いつしか五壇の御修法はじめらる。八日より議定行はせ給ふ。昔の人々のこりなく參りつどふ。十三日大塔の宮都に入りたまふ。この月ごろ御ぐしおふして、えもいはずきよらなる男になり給へ

り。からの赤地の錦の御鎧直垂といふもの奉りて、御馬にてわたり給へば、御供にゆゝしげなるものゝふどもうち圍みて、御門の行幸にもほとゝ〳〵劣るまじかめり。遠に將軍の宣旨をかうぶり給ひぬ。流されし人々ほどなくきほひのぼるさま、枯れに し木草の春にあへる心ちず。その中に季房の宰相入道のみぞ、預りなりけるものの、情なき心ばへやありけむ、東のひしめきのまぎれに失ひてければ、兄の中納言藤房は歸り上れるにつけても、父の大納言、母の尼うへなど、なげきつきせず、胸あかぬ心ちしけり。四條中納言隆資といふも、頭おろしたりし、また髪おふしね。もとより座をいづるにはあらず、かたきのために身を隱さむとて、かりそめにそりしばかりなれば、今はた更に眉をひらく時になりて、男になれらむ、何のはゞかりかあら

むとぞ、ゆゑし心なるとぢ言ひおはせける。天台座主にていませし法親王だにかくおはしませば、さいてとぞ。誰にかおもはむ、そのころ聞きし、

すみぞめの色をもかへつ月草の、
うつれば変はる花のこころに。

◎雲成門院も又中宮と聞ゆ。雲成門院は後鳥羽天皇の中宮藤子のこと。即ち、雲成門院の號を賜わって、元の如く中宮となったのである。愚史鈔抄、「五月十七日己酉、於二伯耆船上山行宮一詔曰、……藤子爲二雲成門院號一、如二元徳二中宮一云々。」◎御位にし年云々。中宮藤子は、元弘二年八月、一旦出家せられたのである。◎御位なほ云々。この史實は少し錯誤してゐるやうに見える。愚史鈔抄によると、六月四日に二條富小路殿で五壇法を行はせられたが、それは安鎮の爲であるやうに書いてある。また太平記には、「元弘三年春の比、云々、北條の囚徒、加二法威力一、不二過若一者、早速に可し誅、得重一とて、衆に警策殿の庭に牽ゐ、竹内右衛門正重を召し百て、天下安鎮の法をぞ修し行はる。」としてある。◎春の人々。元弘の變以前に朝に仕へてゐた人々。◎この月ごろ。昨今。最近などいふ意。◎御くしおろして。御髪の毛をはそして。一旦剃髪せられたのを、再び髪を長くして落飾せられたのである。尊氏法親王は落飾後は護良親王といふ。◎からの赤地の錦。唐土から舶來した赤地の錦。◎綸言の宣旨。征夷大將軍の官を授けられる事を、綸言、宣下といふ。護良親王は六月十三日に歸入洛、天皇を奉じ、征夷大將軍となり、兵部卿に任ぜられた。◎實のひしおのまぎれに。雜食事後の箔つた唐菓子のドサクサに乘じて。◎飽かぬ心ち。心が晴々としない心持。餘韻した心持。露ついてゐる心持。◎屠をいづる。俗生を離棄する意。◎屠をひらく時。妻帶を啟ずるの時、妻帶に溺ふの意。夫木和歌抄、「うき身には捨をあるかひもなし、さらば人だに屠を開くに。」◎男。有妻の俗男。清閑寺に、「大姫入道と云ふ者あり、けり、と、こなりける時云々。」などある男も、法俗の時をいふ。愚家記に、「一生不犯の男童」などあるも、有妻の童といふ意。◎まいてこそ。況んや、既婚に關係して、あしたのおぼほしてゐるはずのは、ある筈であると思つたといふ意。◎誰にかありけむ。作者は誰であつたらうか。次に、「次の歌を讀んだ」といふ句を補うて解く。◎すみぞめの。喪服、昔忍ばれぬ物も變り行く世の習ひにて、喪服の次のもの。「うき身」は、次に「あさはなだ」とある「藍色」などの意味に含めてしまつた。

すみぞめの色をもかへつ月草の、
うつれば変はる花のこころに。

なほ云々。この史實は少し錯誤してゐるやうに見える。愚史鈔抄によると、六月四日に二條富小路殿で五壇法を行はせられたが、それは安鎮の爲であるやうに書いてある。また太平記には、「元弘三年春の比、云々、北條の囚徒、加二法威力一、不二過若一者、早速に可し誅、得重一とて、衆に警策殿の庭に牽ゐ、竹内右衛門正重を召し百て、天下安鎮の法をぞ修し行はる。」としてある。◎春の人々。元弘の變以前に朝に仕へてゐた人々。◎この月ごろ。昨今。最近などいふ意。◎御くしおろして。御髪の毛をはそして。一旦剃髪せられたのを、再び髪を長くして落飾せられたのである。尊氏法親王は落飾後は護良親王といふ。◎からの赤地の錦。唐土から舶來した赤地の錦。◎綸言の宣旨。征夷大將軍の官を授けられる事を、綸言、宣下といふ。護良親王は六月十三日に歸入洛、天皇を奉じ、征夷大將軍となり、兵部卿に任ぜられた。◎實のひしおのまぎれに。雜食事後の箔つた唐菓子のドサクサに乘じて。◎飽かぬ心ち。心が晴々としない心持。餘韻した心持。露ついてゐる心持。◎屠をいづる。俗生を離棄する意。◎屠をひらく時。妻帶を啟ずるの時、妻帶に溺ふの意。夫木和歌抄、「うき身には捨をあるかひもなし、さらば人だに屠を開くに。」◎男。有妻の俗男。清閑寺に、「大姫入道と云ふ者あり、けり、と、こなりける時云々。」などある男も、法俗の時をいふ。愚家記に、「一生不犯の男童」などあるも、有妻の童といふ意。◎まいてこそ。況んや、既婚に關係して、あしたのおぼほしてゐるはずのは、ある筈であると思つたといふ意。◎誰にかありけむ。作者は誰であつたらうか。次に、「次の歌を讀んだ」といふ句を補うて解く。◎すみぞめの。喪服、昔忍ばれぬ物も變り行く世の習ひにて、喪服の次のもの。「うき身」は、次に「あさはなだ」とある「藍色」などの意味に含めてしまつた。

のの者が無情な心がうつつたのであらうが、修善の間絶えつた處遇に乘じて、兄の斬首された事を配慮しようとの遊心から、すでに出家した者も剃髪して還俗したやうなた々しい明い心持がする。其人々の中で、この季相大納言だけが、喪服の中に着ていたが、また妻も生し剃髪して出家した。初めから淨土に往生する心持がしたやうに、身を墨染に變はれるのに、身を墨染につけても、父の大納言は、悲嘆なる尼うへなどは、縁りのぼつた中首級して持つたから、又中將が出家しようとするのは、最後の望みを失つたからではない、朝恩に浴した者同志が、心に深く感じ合うた。天台座主にていませし法親王にてすらあらせられた法親王ですらも、座位は捨てていらしやるから、まして朝恩に浴した者の座位を捨てるのは、ある筈のものであると思つた。初めから淨土に往生する心持がしたやうに、身を墨染に變はれるのに、身を墨染につけても、父の大納言は、悲嘆なる尼うへなどは、縁りのぼつた中首級して持つたから、又中將が出家しようとするのは、最後の望みを失つたからではない、朝恩に浴した者同志が、心に深く感じ合うた。天台座主にていませし法親王にてすらあらせられた法親王ですらも、座位は捨てていらしやるから、まして朝恩に浴した者の座位を捨てるのは、ある筈のものであると思つた。

すみぞめの色をもかへつ月草の、
うつれば変はる花のこころに。

などいふもの、葉は竹に似て夏緑色の花が咲く。此花は容易に物に移ろひつく故に「月草の移ろひ」と言ひつゞけ、「移る」の枕詞に用ゐられてゐる。「うつればかはる」は、時移れば隨つて物事も變化するといふ意。「花のころも」は花の如く華美な衣服といふ意で、俗人の着る衣服をさす。

校定 増鏡新釋下卷 終

大正七年六月廿八日印刷　校定增鏡新釋下卷
大正七年七月一日發行　定價金壹圓

不許複製

著者　永井一孝
著者　竹野長次
發行者　東京市神田區表神保町五番地　近田喜太郎
印刷者　東京市神田區雲本町五番地　高橋治一

發行所　東京市神田區表神保町五番地　近田書店出版部　電話本局二〇五九
發賣所　東京市神田區雲本町五番地　誠文堂書店　電話本局二九一〇

（中正社印刷所）

最も高評ある國文註釋
解釋懇切。携帶至便。

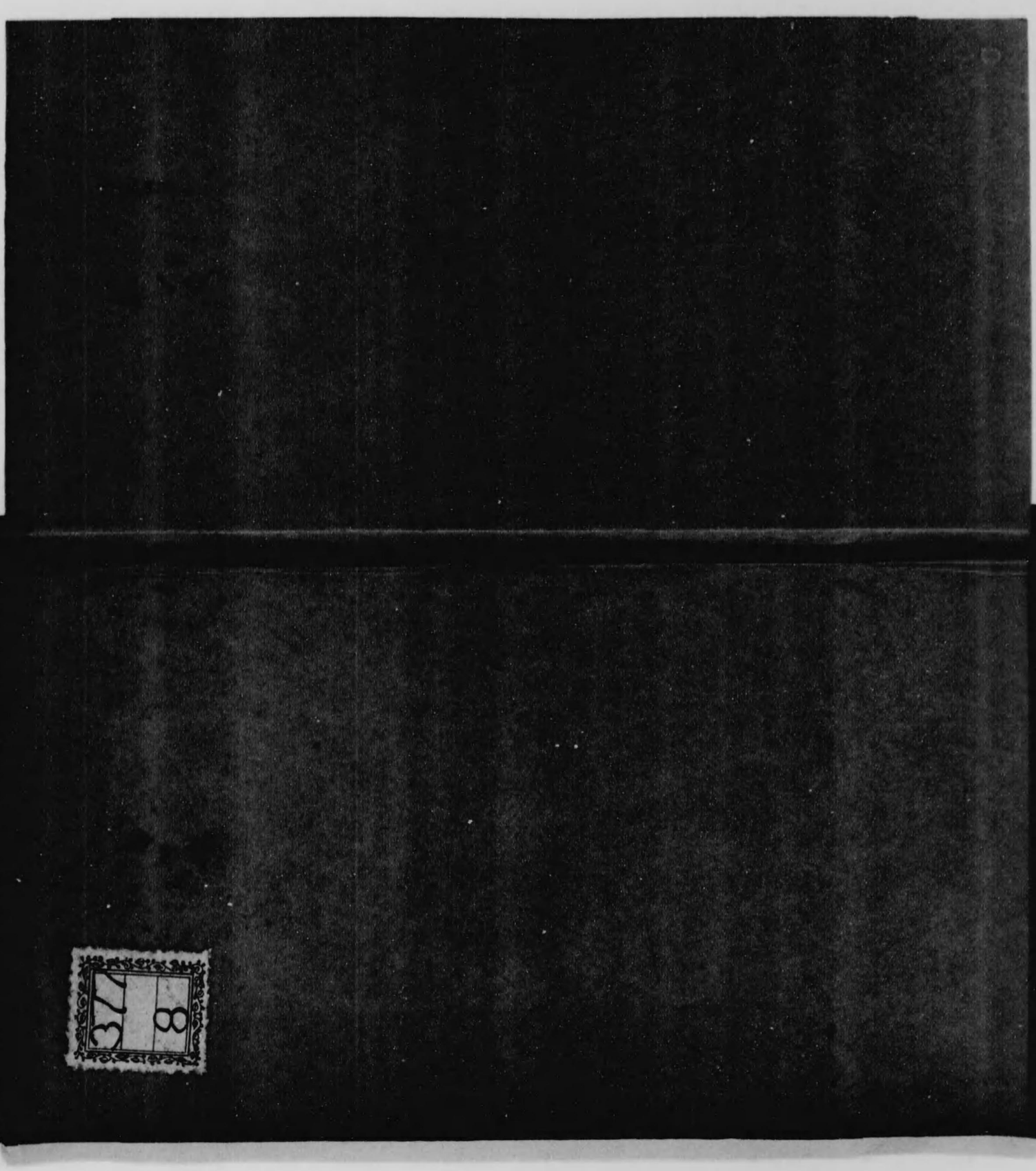
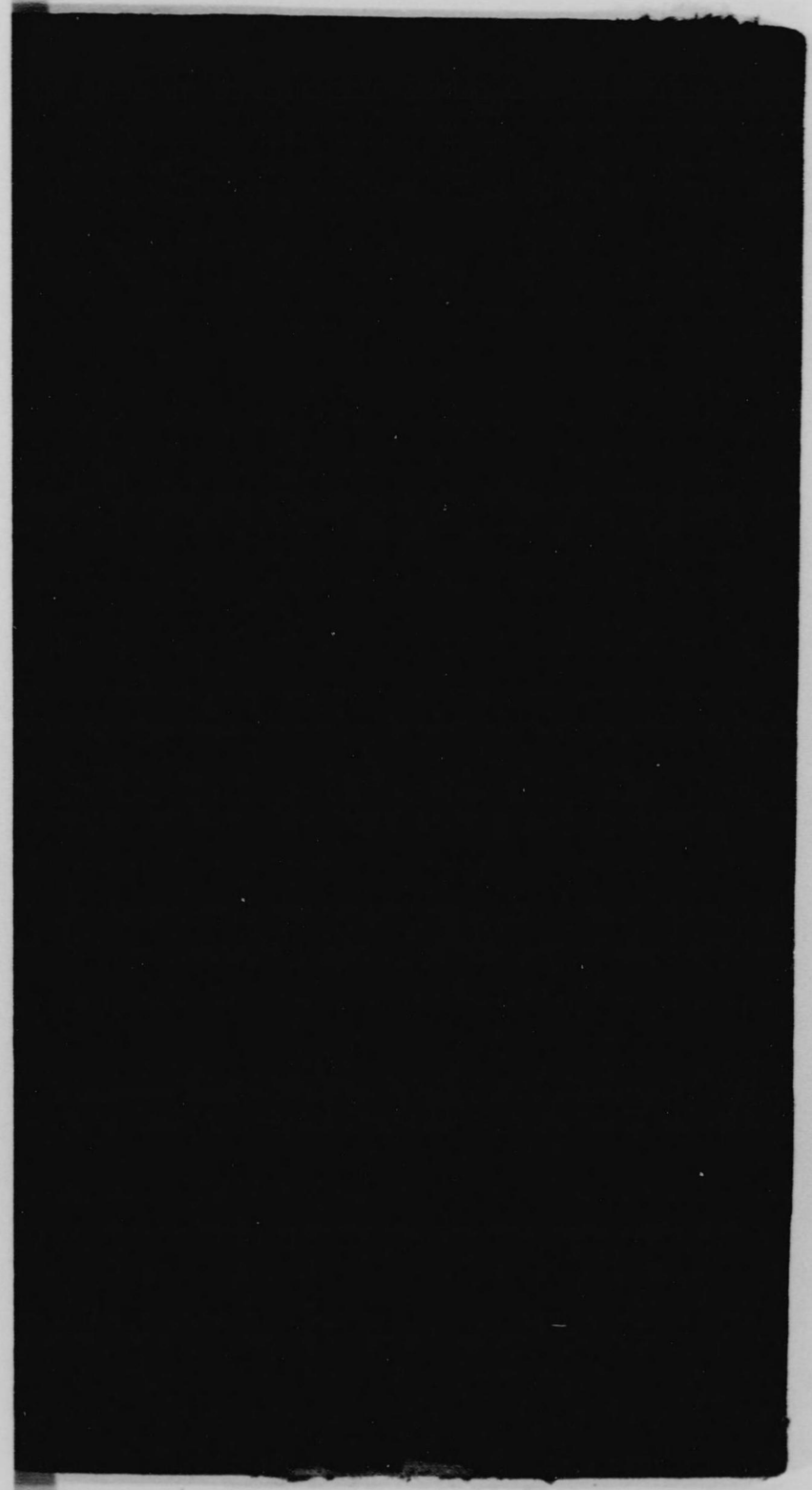
第四版 校定 徒然草新釋
第三版 校定 増鏡新釋 上卷
新版 校定 増鏡新釋 下卷
（大正七年八月上旬發賣）
校定 方丈記新釋
（定價未定）

紙數約五百頁 定價九拾五錢 送料六錢
紙數約五百頁 定價九拾錢 送料六錢
紙數五百五十頁 定價壹圓 送料六錢

全壹冊六百頁 定價九拾五錢 送料六錢

新編 芳賀矢一 竹野長次 兩先生共著

近田書店出版部



終